

力武内畑遺跡8・9・10

— 福岡県小郡市力武・三沢所在遺跡の調査 —

小郡市文化財調査報告書第236集

2 0 0 8

小郡市教育委員会

序

本書は、小郡市力武・三沢において計画されました「本郷基山線 街路緊急地方道路整備事業」に先立ち、小郡市教育委員会が実施いたしました力武内畑遺跡 8・9・10地点の発掘調査の記録です。

調査地は、小郡市のほぼ中央を南北に貫流する宝満川の西側、小郡市力武及び三沢に所在します。力武内畑遺跡は、これまでに7地点において調査が行われ、弥生時代の住居や井堰、溝、水田、古墳時代の住居、建物跡、江戸時代の溝など多くの遺構や遺物が確認されています。

本書に記録しました力武内畑遺跡 8・9・10におきましては、弥生時代の溝や古代の掘立柱建物、中世の土壇墓、中世～近世の畑跡などが確認され、力武内畑遺跡周辺の土地利用が明らかとなってきました。

この様に埋蔵文化財は、地域の歴史を明らかにするうえで欠かす事の出来ない貴重な文化遺産です。本書が文化財に対するご理解、更には教育及び学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり福岡県久留米土木事務所をはじめ地元の方々にご理解とご協力いただきましたことに厚く感謝いたします。

平成20年3月10日

小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例言

1. 本書は、「本郷基山線 街路緊急地方道路整備事業」に伴い、小郡市教育委員会が発掘調査を行った力武内畑遺跡 8・9・10の報告書である。
2. 調査期間は、平成18年10月23日から平成19年2月1日までである。
3. 調査面積は、力武内畑遺跡 8 が429m²、力武内畑遺跡 9 が345m²、力武内畑遺跡10が513.1m²である。
4. 本調査は、沖田正大が行った。
5. 遺構全体図の作成及びデジタルトレースは、(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。個別遺構図の作成は吉田あや子、柿本慈、山本絹子、横田雅江、百嶋八千代、山下幸子、沖田が行い、製図は馬田妙子、熊本啓子が行った。
6. 遺構の個別写真の撮影は沖田が行い、遺跡全景写真の撮影は九州航空(株)に委託した。遺物写真の撮影は、(有)文化財写真工房 岡紀久雄氏に委託した。
7. 遺物の復元は石橋和子、佐々木智子、田鍋桂子、百嶋が行い、実測は中島圭、沖田が行った。
8. 本書に記載した遺構略号は、B：掘立柱建物跡、D：溝、K：土坑、P：柱穴である。
9. 遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
10. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
11. 本書の執筆、編集は沖田が行った。

本文目次

第1章	調査に至る経過と組織	1	第4章	力武内畑遺跡9の調査	16
1	調査に至る経過	1	1	概要	16
2	調査組織	1	2	溝状遺構	16
3	調査の経過	2	3	柱穴	21
第2章	位置と環境	3	第5章	力武内畑遺跡10の調査	22
第3章	力武内畑遺跡8の調査	6	1	概要	22
1	概要	6	2	土坑	22
2	掘立柱建物跡	7	3	溝状遺構	28
3	土坑	11	4	柱穴	34
4	溝状遺構	13	第6章	まとめ	39
5	柱穴	14			

図版目次

表紙	調査区より東を望む	図版8	SD-1小壺・土器溜り、SD-2、SK-1～3全景
図版1	力武内畑遺跡8・9・10全景	図版9	SK-4～7、SD-3・4全景、SK-4遺物出土状況
図版2	力武内畑遺跡8調査区、SB-2、SD-1全景	図版10	SD-1・3、SK-4土層、SK-4遺物出土状況、力武内畑遺跡8・9・10調査参加作業員
図版3	SB-1全景、SK-1・2・3・4・5全景	図版11	力武内畑遺跡8・9出土遺物
図版4	SP-1・2・3、SK-2・3、SD-1土層	図版12	力武内畑遺跡10A区SD-1出土土器・投弾
図版5	力武内畑遺跡9調査区、SD-2・4・6・7全景	図版13	力武内畑遺跡10B区、8・10A・B区出土遺物
図版6	SD-1・2・3・4・6・7土層		
図版7	力武内畑遺跡10A・B区調査区、SD-1全景		

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	4
第2図	力武内畑遺跡調査範囲図 (S=1/2,500)	6
第3図	力武内畑遺跡8 SB-1平・断面図 (S=1/40)	7
第4図	力武内畑遺跡8 遺構配置図 (S=1/150)	8
第5図	力武内畑遺跡8 調査区北壁土層断面図 (S=1/40)	9
第6図	力武内畑遺跡8 SB-2平・断面図 (S=1/40)	10
第7図	力武内畑遺跡8 SK-1・2平・断面図 (S=1/40)	11
第8図	力武内畑遺跡8 SK-3・4平・断面図 (S=1/40)	12
第9図	力武内畑遺跡8 SD-1平・断面図 (平面S=1/80、断面S=1/20)	13
第10図	力武内畑遺跡8 出土遺物実測図 (S=1/3)	14
第11図	力武内畑遺跡8 SD-1出土土製品実測図 (S=1/2)	14
第12図	力武内畑遺跡9 遺構配置図 (S=1/150)	15
第13図	力武内畑遺跡9 調査区南壁土層断面図 (S=1/40)	17
第14図	力武内畑遺跡9 調査区西壁土層断面図 (S=1/40)	18
第15図	力武内畑遺跡9 SD-1・3・5・6・7土層断面図 (S=1/20)	19
第16図	力武内畑遺跡9 SD-2・4平・断面図 (平面S=1/60、断面S=1/20)	20
第17図	力武内畑遺跡9 出土遺物実測図 (S=1/3)	21
第18図	力武内畑遺跡10A・B区遺構配置図 (S=1/150)	23
第19図	力武内畑遺跡10A区調査区東・南壁土層断面図 (S=1/60)	25
第20図	力武内畑遺跡10B区調査区東・北壁土層断面図 (S=1/60)	26
第21図	力武内畑遺跡10B区SK-2・3・5・6・7平・断面図 (S=1/40)	27
第22図	力武内畑遺跡10B区SK-4平・断面図 (S=1/20)	28
第23図	力武内畑遺跡10A区SD-1平・断面図 (平面S=1/80、遺物・断面S=1/20)	29
第24図	力武内畑遺跡10A区SD-1土層断面図 (S=1/20)	30
第25図	力武内畑遺跡10B区SD3・4土層断面図 (S=1/20)	32
第26図	力武内畑遺跡10A・B区出土遺物実測図 (S=1/3)	33
第27図	力武内畑遺跡8・9・10遺構配置図 (S=1/400)	35
第28図	力武内畑遺跡・力武前畑遺跡調査区配置図 (S=1/1,000)	37

表目次

第1表	遺跡一覧表	5
-----	-------	---

第1章 調査に至る経過と組織

1. 調査に至る経過

「本郷基山線 街路緊急地方道路整備事業」に伴い福岡県久留米土木事務所から平成18年6月5日及び同年6月30日、同年10月18日、同年12月4日付で工事対象地における埋蔵文化財の有無について照会文書が小郡市教育委員会文化財課に提出された。対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから平成18年6月12日、同年7月7日、同年10月23日、同年12月11日にトレンチを計19本設定し試掘調査を行った。

試掘調査の結果をもとに福岡県久留米土木事務所および小郡市道路建設課と協議を行い、遺跡の存在が確認された箇所において発掘調査を実施する事となった。発掘調査対象地の内、平成18・19年度工事予定箇所を力武内畑遺跡8・9・10として平成18年度に発掘調査を実施し、残地においては平成19年度に三沢南崎遺跡2・3・4として発掘調査を実施する事となった。

調査期間は、平成18年10月23日～同年11月17日（力武内畑遺跡9）、平成18年11月29日～同年12月26日（力武内畑遺跡8）、平成19年1月9日～同年2月1日（力武内畑遺跡10）である。

2. 調査組織

平成18年度

[道路建設関係]

〈福岡県久留米土木事務所〉

所 長 馬場 満
副所長（事務）井口 幸雄
副所長（技術）重富 博良

都市施設整備課

課 長 吉富 清治
副 長 大隈 徹浩
主任技師 稲富 剛

〈小郡市都市建設部道路建設課〉

部 長 組坂 弘幸
課 長 佐藤 吉生
係 長 丸山 義勝
小中 謙一
東園 清隆

[発掘調査関係]

〈小郡市教育委員会教育部文化財課〉

教 育 長 清武 輝
教 育 部 長 高木 良郎
課 長 田箆千代太
係 長 片岡 宏二
嘱 託 技 師 沖田 正大（調査担当）

〈発掘調査従事者〉

黒瀬シゲ子、黒瀬 明、田中安美子、田中フジ子、福田喜代子、福田浪子、福田康博、松永康弘、宮崎隆明、山下幸子、山本絹子、横田雅江

平成19年度

[道路建設関係]

〈福岡県久留米土木事務所〉

所 長 櫛川 知彦
副所長（事務）溝口 正信
副所長（技術）吉岡 慶介

都市施設整備課

課 長 梶島 淳二
副 長 大隈 徹浩
主任技師 稲富 剛

〈小郡市建設部道路建設課〉

部 長 高木 良郎
課 長 佐藤 吉生
係 長 丸山 義勝
小中 謙一
東園 清隆

[発掘調査関係]

〈小郡市教育委員会教育部文化財課〉

教 育 長 清武 輝
教 育 部 長 池田 清巳
課 長 田箆千代太
係 長 重松 正喜
企 画 主 査 片岡 宏二
嘱 託 技 師 沖田 正大（整理担当）

3. 調査の経過

以下、調査の経過を調査地点ごとに調査日誌より抜粋する。

力武内畑遺跡 8

平成18年11月29日（水）晴：仮設道設置、表土剥ぎ開始。12月4日（月）晴：表土剥ぎ終了、溝状遺構1条、土坑2基確認。12月5日（火）曇りのち晴：作業員による掘削開始、廃土置き場設置、調査区壁面土層精査のち撮影。12月7日（木）雨：降雨により作業休み。12月11日（月）晴：調査区東側遺構掘削、SK-1・2・3ベルト土層撮影、SP-1土層撮影。12月12日（火）曇り：遺構掘削、SP-2・3土層撮影、SK-4ベルト土層撮影。12月13日（水）雨：調査区中央部攪乱掘削、基準点測量。12月15日（金）晴：SD-1掘削。12月18日（月）雨のち曇り：SD-1掘削、調査区東壁一部拡張、掘立柱建物を検出、SK-1～4、SP-1～3、SD-1ベルト、調査区南壁土層図作成、SD-1ベルト土層撮影、遺構全体図作成開始。12月19日（火）晴：遺構掘削、SD-1調査区南壁部分土層撮影、遺構掘削終了。12月20日（水）晴：調査区北壁及び南壁土層図作成、1/20遺構全体図作成、現地実測作業終了。12月21日（木）曇り：調査区全景撮影準備。12月22日（金）晴：調査区全景撮影、SK-1～5、SP-1～9、SB-1・2撮影、作業員による作業終了。12月25日（月）晴一時雨：埋め戻し開始。12月26日（火）曇りのち雨：埋め戻し終了、本日をもって力武内畑遺跡8調査終了。

力武内畑遺跡 9

平成18年10月23日（月）晴：プレハブ・仮設トイレ設置、表土剥ぎ開始。10月24日（火）曇り時々雨：表土剥ぎ、調査区西側で柱穴・溝状遺構を確認。10月26日（木）晴：表土剥ぎ終了。10月30日（月）晴：作業員による掘削開始、調査区南壁・西壁土層撮影、遺構検出、遺構掘削。10月31日（火）晴：SD-1・2・3・4掘削。11月1日（水）晴：SD-5・6・7掘削。11月2日（木）晴：SD-6・7、攪乱掘削。11月6日（月）曇り：SD-6・7掘削、SD-6・7ベルト土層撮影。11月8日（水）晴：SD-5掘削、SD-1～4調査区南壁部分土層撮影、基準点測量。11月9日（木）晴：調査区東壁土層図作成、SD-2・4・6・7ベルト土層図作成、SD-5ベルト土層、SD-7調査区北壁部分土層撮影。11月13日（月）晴のち曇り：調査区全景撮影準備、調査区全景撮影、SD-1～7全景撮影、作業員による掘削作業終了。11月14日（火）雨のち曇り：地形測量、調査区全景、SD-1～7全景撮影。11月15日（水）晴：1/20遺構全体図作成。11月18日（木）曇り時々晴：1/20遺構全体図作成、埋め戻し開始。11月17日（金）晴：埋め戻し、埋め戻し終了、本日をもって力武内畑遺跡9調査終了。

力武内畑遺跡10

平成19年1月9日（火）晴：表土剥ぎ開始。1月11日（木）晴：東側調査区をA区、西側調査区をB区と設定、A区表土剥ぎ終了。1月12日（金）晴：作業員による掘削開始、A区調査区南壁・東壁土層撮影、B区表土剥ぎ開始。1月15日（月）晴：A区SD-1掘削、B区表土剥ぎ。1月16日（火）曇り時々雨：A区SD-1掘削、B区表土剥ぎ終了。1月18日（木）曇りのち晴：A区SD-1調査区東壁部分土層・ベルト土層撮影、SD-1遺物出土状況撮影、B区調査区壁面土層撮影、遺構掘削開始。1月23日（火）B区遺構掘削、B区SD-3ベルト土層、SK-3ベルト土層撮影。1月24日（水）曇りのち晴：B区遺構掘削、SK-2～4・SD-3ベルト土層図作成、SK-4ベルト土層・SK-4遺物出土状況撮影。1月25日（木）晴：A区SD-1ベルト土層図・調査区東壁土層図・調査区南壁土層図作成、B区SD-4・SK-5ベルト土層図・調査区東壁土層図・調査区北壁土層図作成、B区SD-4・SK-5ベルト土層撮影、B区遺構全体図作成。1月26日（金）曇りのち雨：遺構全体図作成。1月29日（月）曇りのち晴：全景撮影準備。1月31日（水）曇りのち晴：調査区全景撮影、A区SD-1・2・SK-1全景撮影、B区SK-2～7・SD-3・4全景撮影。2月1日（木）A区調査区東・南壁土層図作成、B区調査区東・北壁土層図作成、本日をもって力武内畑遺跡10調査終了。

第2章 位置と環境

力武内畑遺跡8・9・10は、福岡県小郡市力武及び三沢に所在する。所在地の詳細は、8地点・10地点A区が小郡市力武、9地点、10地点B区が小郡市三沢である。調査地は、小郡市のほぼ中央を南北に貫流する宝満川の右岸、三国丘陵から派生する低位段丘の縁辺部に位置する。

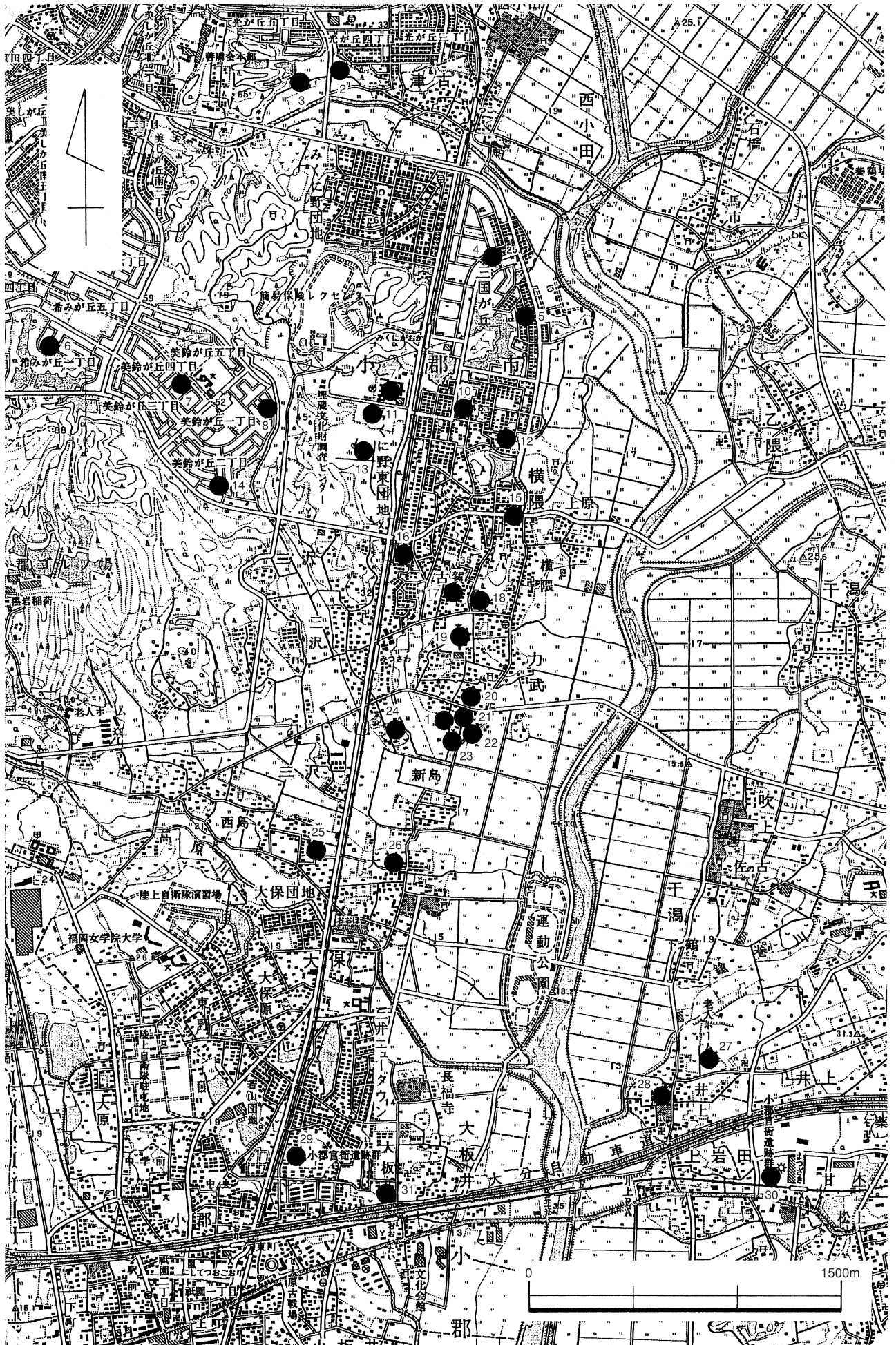
力武内畑遺跡は、弥生時代から古墳時代の集落として知られ、4地点(20)では弥生時代前期・古墳時代後期の溝や土坑、力武内畑遺跡8の東側に隣接する5・6地点(21)では古墳時代の方形住居跡が確認されている。なかでも力武内畑遺跡7(23)においては稲作開始期の集落と水田や井堰といった生産域がセットで確認され、当地域における稲作開始期の集落構成や土地利用が明らかとなった遺跡である。また、4地点において確認されたSD-10は今回確認した10地点A区のSD-1と繋がるものと考えられ、当地域における弥生時代前期の集落域を知る上で重要な溝である。

今回の調査地点である9地点の西側には谷が形成され、水田として利用されている。また、現在市道及び宅地、畑として利用されている10地点A区、B区においても周辺が近年まで水田として利用されていたことや、水田への利水の為に池が作られていた事が周囲から聞き取られ、調査においても10地点B区が10地点A区の所在する東側に向かい傾斜する事が確認でき、本来10地点A区、B区の間において谷が形成されていたと考えられる。これらの事から、調査地周辺は力武内畑遺跡7地点において確認された様に低湿地が広がり、古くより水田耕作が行われていたようである。

本調査地北側には三国丘陵から派生する同一の低位段丘が広がり、弥生時代前期の木棺墓や中期の甕棺墓が確認され、三国の鼻1号墳が所在した事でも知られる三国の鼻遺跡(5)、弥生時代前期の住居跡や貯蔵穴群、弥生時代中期の甕棺墓群、古代の住居跡が確認された横隈狐塚遺跡(12)、弥生時代前期の住居跡や6～8世紀の住居跡、掘立柱建物などが確認された横隈十三塚遺跡(15)、弥生時代前期の土坑や中期前半にかけての土壙墓、中・近世の土坑や溝が確認された三沢古賀遺跡(17)、弥生時代中期～後期の住居跡が確認された三国小学校遺跡(19)など数多くの遺跡が所在している。また、力武内畑遺跡の東に隣接する力武前畑遺跡(22)では弥生時代前期～中期の住居跡や古墳時代前期の住居跡が確認されている。

三国丘陵および三国丘陵から派生する段丘一帯は、小郡市北部に位置し、福岡平野から同平野が背振山系と三郡山地に挟まれ狭くなる二日市地峡帯を経て筑紫平野へと至る筑紫平野側の出入りに位置し、両平野間に置ける交流の拠点と成り得る地域である。この様な地理的条件も要因の一つとなるのか三国丘陵及び派生する段丘上には数多くの遺跡が確認されている。弥生時代においては、三沢北中尾遺跡(13)や一ノ口遺跡(8)、北松尾口遺跡(14)などの様に集落を考える上で重要な遺跡が多く見られ、本調査地西側に入る谷を隔て南北に延びる段丘先端部には三沢南崎遺跡(24)が所在し、平成17年度に調査が実施され環濠を持つ弥生時代前期前半代の集落が確認されている。この様な環濠を持つ集落は横隈山遺跡(16)や三沢北中尾遺跡においても確認され、環濠と貯蔵穴、住居との変遷や環濠の性格などを示す資料が得られている。古墳時代においては津古生掛古墳(4)、横隈山古墳(10)、三国の鼻1号墳、苅又地区遺跡群(6)に所在する三沢古墳群(7)など多くの古墳が築かれている。また、苅又地区遺跡群内では須恵器窯が確認された他、苅又遺跡群の東に近接し前方後円墳である横隈山古墳への埴輪供給の可能性が指摘される埴輪窯が三沢蓬ヶ浦遺跡3地点(11)で確認され、三国丘陵において須恵器や埴輪の生産が行われていた事が明らかとなった。古代においては、先述した様に横隈地区において集落が確認されている。横隈地区は、横隈狐塚遺跡が所在する段丘頂部付近から力武地区と繋がる段丘中位まで広がり、平成18年度に調査を実施した横隈外浦遺跡(18、平成19年度報告予定)においても古代の方形竪穴式住居が確認されている。同時期には三国丘陵から離れるが市域に旧御原郡(小郡市北半、旧甘木市、大刀洗町の一部)の郡衙跡とされる小郡官衙遺跡(29)が所在し、横隈地区で確認された集落や今回の調査で確認された掘立柱建物跡など官衙周辺の様相を考える上で良好な資料である。

この様に本遺跡の所在する力武地区は、小郡市内において数多くの遺跡が所在する地域にあり、力武内畑遺跡7において確認された様に集落・生産域が明らかとなり弥生時代前期の様相を把握できる重要な地域である。



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

第1表 遺跡一覧表

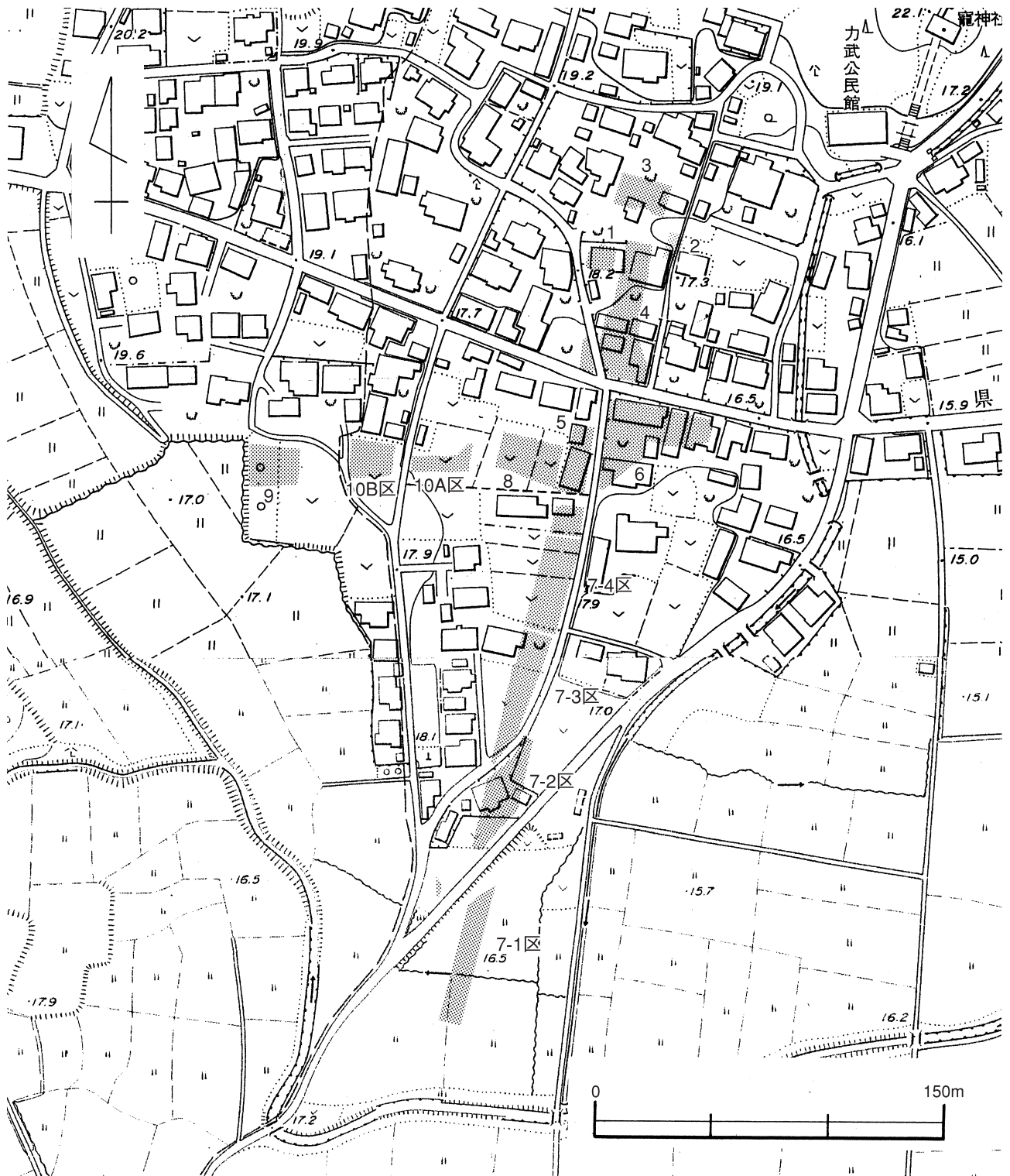
	遺跡名	所在地	内容	主な時代
1	力武内畑遺跡8・9・10	小郡市力武・三沢	集落	弥生・古代・中世
2	津古牟田遺跡4	小郡市津古	墓地	弥生
3	津古片曾葉遺跡	小郡市津古	集落・古墳	弥生・古墳
4	津古生掛古墳	小郡市津古	古墳	古墳
5	三国の鼻遺跡	小郡市津古・横隈	集落・墓地・古墳	弥生・古墳
6	苺又地区遺跡郡	小郡市三沢	集落・古墳・窯跡	縄文・弥生・古墳
7	三沢古墳群	小郡市三沢	古墳	古墳
8	一ノ口遺跡	小郡市三沢	集落	弥生
9	三沢蓬ヶ浦遺跡	小郡市三沢	集落	弥生
10	横隈山古墳	小郡市横隈	古墳	古墳
11	三沢蓬ヶ浦遺跡3地点	小郡市三沢	集落・窯跡	弥生・古墳
12	横隈狐塚遺跡	小郡市横隈	集落・墓地	弥生・古墳
13	三沢北中尾遺跡	小郡市三沢	集落・墓地	弥生・古墳
14	北松尾口遺跡	小郡市三沢	集落	弥生
15	横隈十三塚遺跡	小郡市横隈	集落・墓地	弥生・古代
16	横隈山遺跡	小郡市三沢・三国ヶ丘	集落	弥生
17	三沢古賀遺跡	小郡市三沢	集落・墓地	弥生・中世・近世
18	横隈外浦遺跡	小郡市横隈	集落	古代
19	三国小学校遺跡	小郡市力武	集落	弥生
20	力武内畑遺跡4	小郡市力武	集落	弥生・古墳・江戸
21	力武内畑遺跡5・6	小郡市力武	集落	弥生・古墳
22	力武前畑遺跡	小郡市力武	集落	弥生・古墳
23	力武内畑遺跡7	小郡市力武	生産域・集落	弥生・古墳・近世
24	三沢南崎遺跡	小郡市三沢	集落	弥生
25	三沢寺小路遺跡	小郡市三沢	集落	古墳・中世・近世
26	大保毎々遺跡	小郡市大保	集落	中世・近世
27	井上南内原遺跡	小郡市井上	集落	古代
28	井上廃寺	小郡市井上	集落・寺院跡	弥生・古墳・古代
29	小郡官衙遺跡	小郡市小郡	集落・官衙	弥生・古墳・古代
30	上岩田遺跡	小郡市上岩田	集落・寺院・官衙・墓地	縄文・弥生・古墳・古代
31	大板井遺跡	小郡市大板井	集落・墓地	弥生

第3章 力武内畑遺跡8の調査

1. 概要

調査地は、平成13年度に調査を実施した力武内畑遺跡5の西に隣接する。近年まで畑として利用されていた為、ほぼ全域に渡り削平を受けていた。調査面積は、429m²である。

調査は、重機により表土を除去した後、作業員により遺構検出、遺構掘削を行った。調査地は、近接する住宅建設に伴い廃土置き場の設置が困難であった為、調査区全体の遺構の残存状況を考慮し、最初に西端部分において検出・掘削を行い、掘り込みが植木等による攪乱のみである事を確認した後に廃土置き場として設定し、引き続き残り部分の作業へと移行した。基本層序は、表土の下、暗褐色ローム地山となる。



第2図 力武内畑遺跡調査範囲図 (S=1/2,500)

部分的ではあるが表土の下に黒褐色弱粘質土の堆積が見られる。遺構は、地山面で検出した。遺構検出面の標高は、17.61~17.78mである。

検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑5基、溝状遺構1条、柱穴である。出土遺物は、弥生土器甕、土師器高杯・皿、須恵器坏身・坏蓋、土鍋、青磁碗、土錘である。

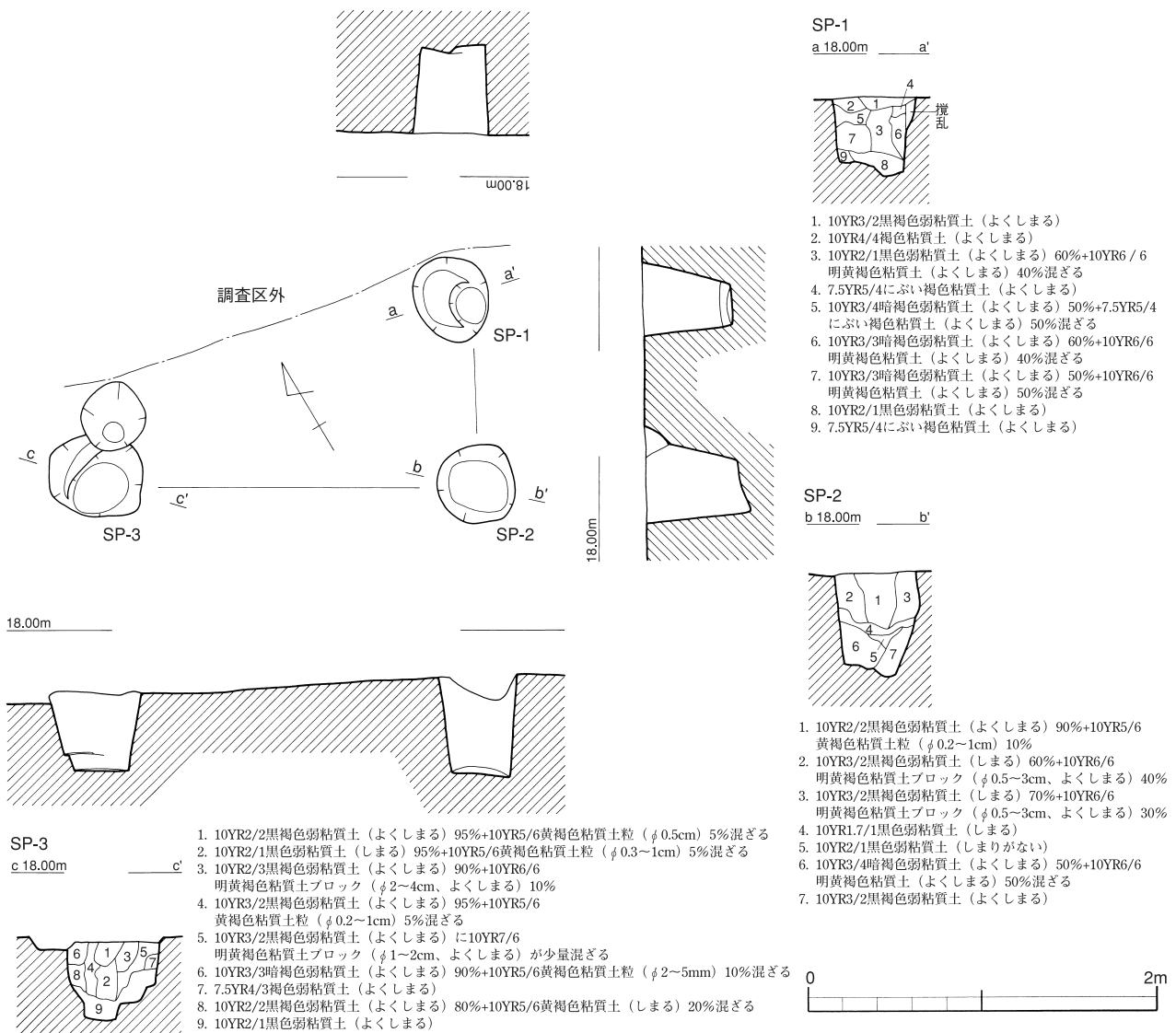
調査期間は、平成18年11月26日（水）～同年12月26日（火）である。

2. 掘立柱建物跡

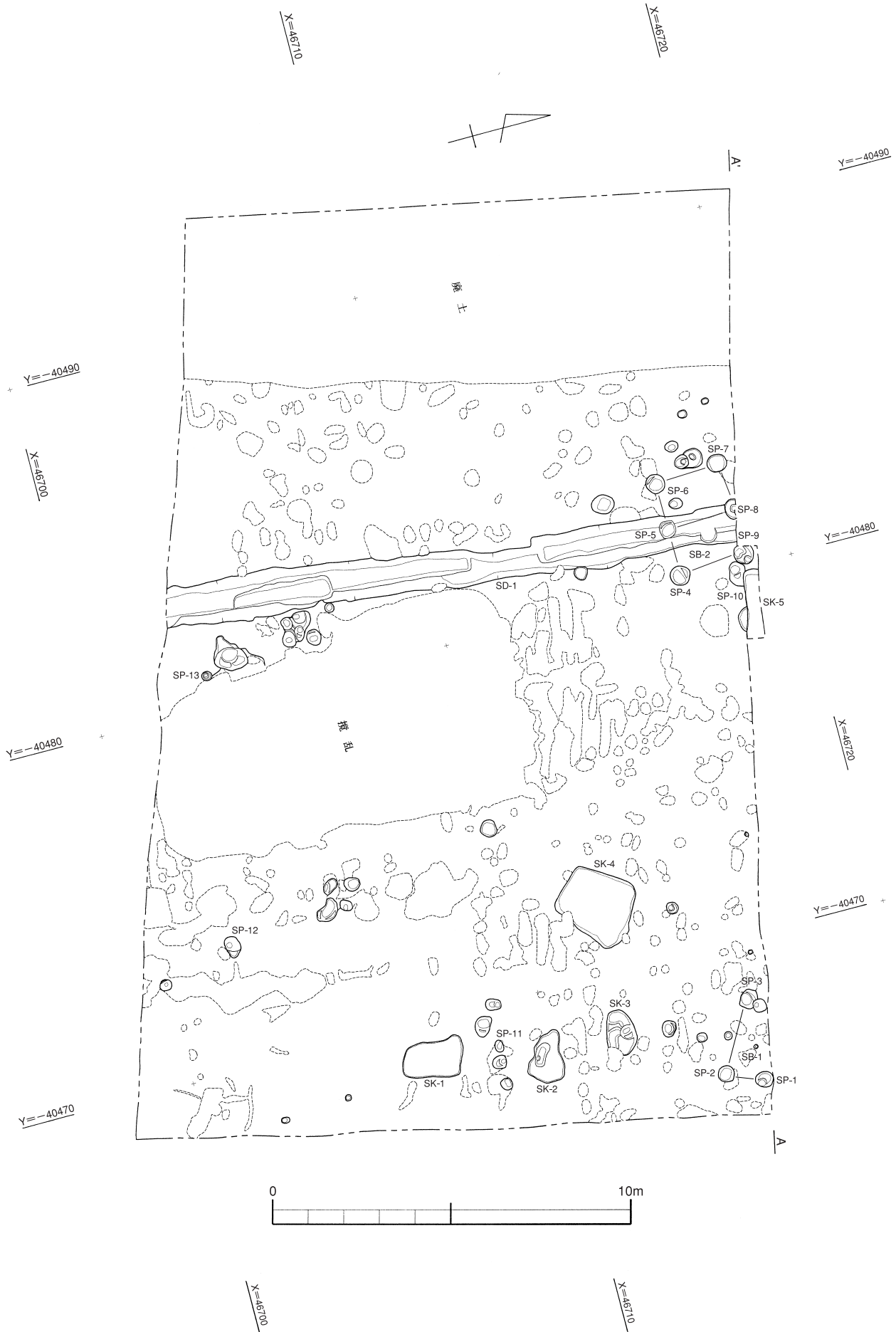
SB-1（第3図、図版3）

SB-1は、調査区北東隅部で検出した。検出した柱穴は、3基のみである。柱穴の中心間の距離は、北東（SP-1）-南西（SP-2）方向1.05m、北西（SP-3）-南東（SP-2）方向2.15mである。柱穴の規模及び平面プランは、SP-1長軸50cm、短軸44cm、深さ53cmの楕円形プランを呈する。SP-2直径45cm、深さ60cmの円形プランを呈する。SP-3長軸53cm、短軸46cm、深さ49cmの不整長方形プランを呈する。SP-1及びSP-3の柱穴内西側にテラスが1段付く。柱穴の間隔や周辺遺跡で確認された掘立柱建物跡の構造を考慮すると9本柱の総柱建物跡と思われる。

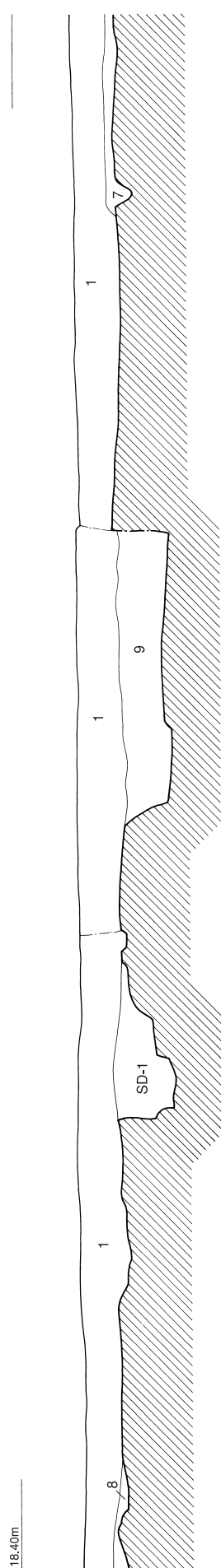
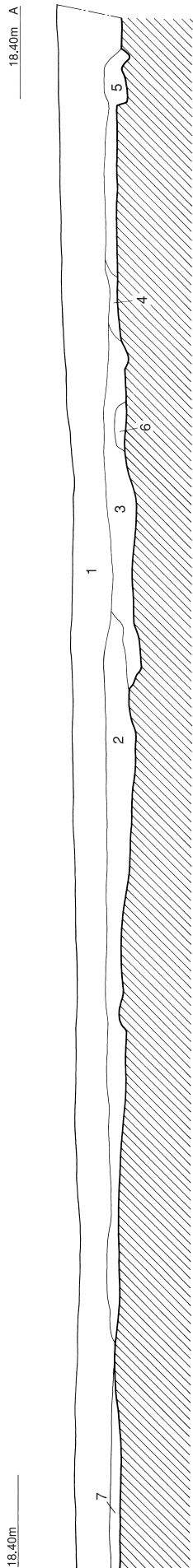
遺物は、SP-2より須恵器小片が出土したが図化するに至らなかった。また、小片の為、器種等は不明である。



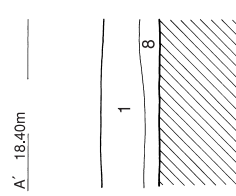
第3図 力武内畑遺跡8 SB-1 平・断面図（S=1/40）



第4図 力武内畑遺跡8 遺構配置図 (S=1/150)



1. 表土
2. 7.5YR3/1黒褐色弱粘質土 (φ1~5mm砂粒含む、よくしまる)
3. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ1~5mm砂粒含む、よくしまる)
4. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (しまる)
5. 10YR2/1黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
6. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
7. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
8. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
9. 7.5YR4/2灰褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒含む、土器片・瓦等含む、よくしまる) 70%+10YR5/6黄褐色粘質土ブロック (φ0.5~6cm、よくしまる) 30% SK-5埋土



第5図 力武内畑遺跡 8 調査区北壁土層断面図 (S=1/40)

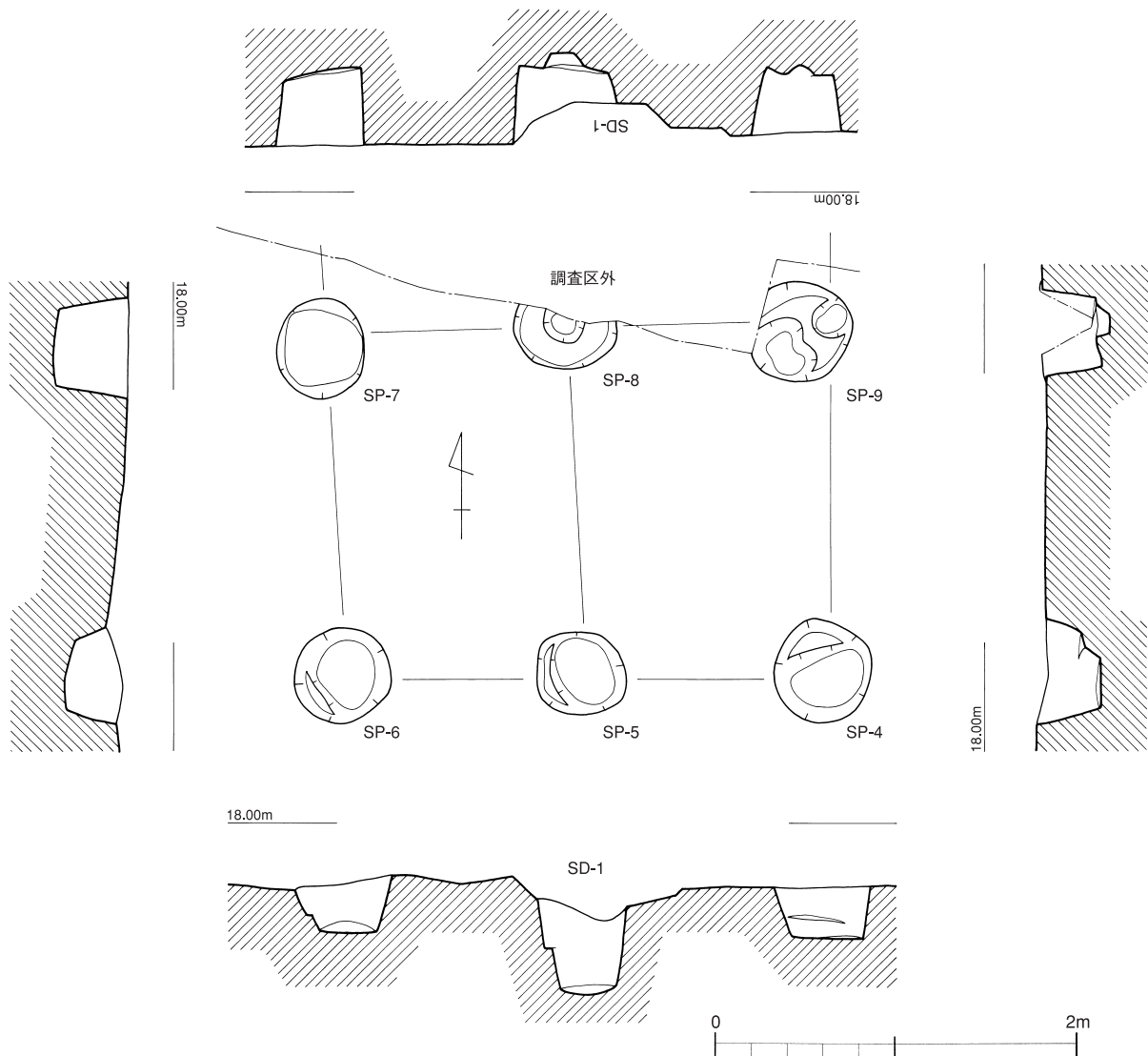
SB-2 (第6図、図版2)

SB-2は、調査区北西部で検出した。検出した柱穴は、6基である。SP-9確認の為、調査区を北側に一部拡張した。各柱穴の中心間の距離は、SP-4～SP-5～SP-6（東西方向）が1.35m、1.32m、SP-7～SP-8～SP-9（東西方向）が1.35m、1.5m、SP-4～SP-9（南北方向）が2m、SP-5～SP-8（南北方向）が2m、SP-6～SP-7（南北方向）が1.85mである。SB-2もSB-1同様に、さらに北側に東西方向で3本の柱が並び9本柱の総柱建物跡になると考えられる。調査区にかかる為、未検出の3本柱を確認した南北方向の間隔と同距離に存在するものと考え、規模は柱穴の中心間の距離で南北方向が約4m、東西方向が2.67～2.85mを測る。また、主軸はほぼ南北方向をとる。各柱穴の規模及び平面プランは、SP-4直径55cm、深さ31cmの円形プランを呈し、北側に一段テラスが付く。SP-5長軸54cm、短軸49cm、深さ47cmの隅丸方形に近いプランを呈し、西側に一段テラスが付く。SP-6直径55cm、深さ30cmの円形プランを呈し、南西部に一段テラスが付く。SP-7長軸55cm、短軸48cm、深さ42cmの楕円形を呈する。SP-8直径57cm、深さ（最深部）49cmの円形プランを呈し、中央部に柱を据えたと思われる円形の掘り込みが確認された。SP-9長軸60cm、短軸55cm、深さ（最深部）37cmの隅丸方形に近い楕円形を呈し、床面には北東部と南西部に掘り込みが確認されるが、他の柱穴の配置から北東部の掘り込みに柱をすえたものと考えられる。柱穴床面の標高は、17.06～17.4mでSP-5床面が最も低くなる。

遺物は、SP-5から1点のみ出土した。

出土遺物 (第10図、図版13)

1は、須恵器坏蓋の口縁部である。外面は回転ヘラ削りのちナデ、口唇部内外面及び内面は回転ナデ調



第6図 力武内畑遺跡8 SB-2平・断面図 (S=1/40)

整が施される。口唇部の断面は三角形に近く、若干内傾ぎみに短く屈曲する。胎土は、細砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調は、褐灰色 (7.5YR6/1) を呈する。残存高は、1.5cmである。内面に墨と思われる黒色の付着が見られ、硯として転用された可能性が考えられる事から、赤外線カメラによる撮影、赤外線スキャナーによる画像取込みを行ったが、明確なものは得られなかった。

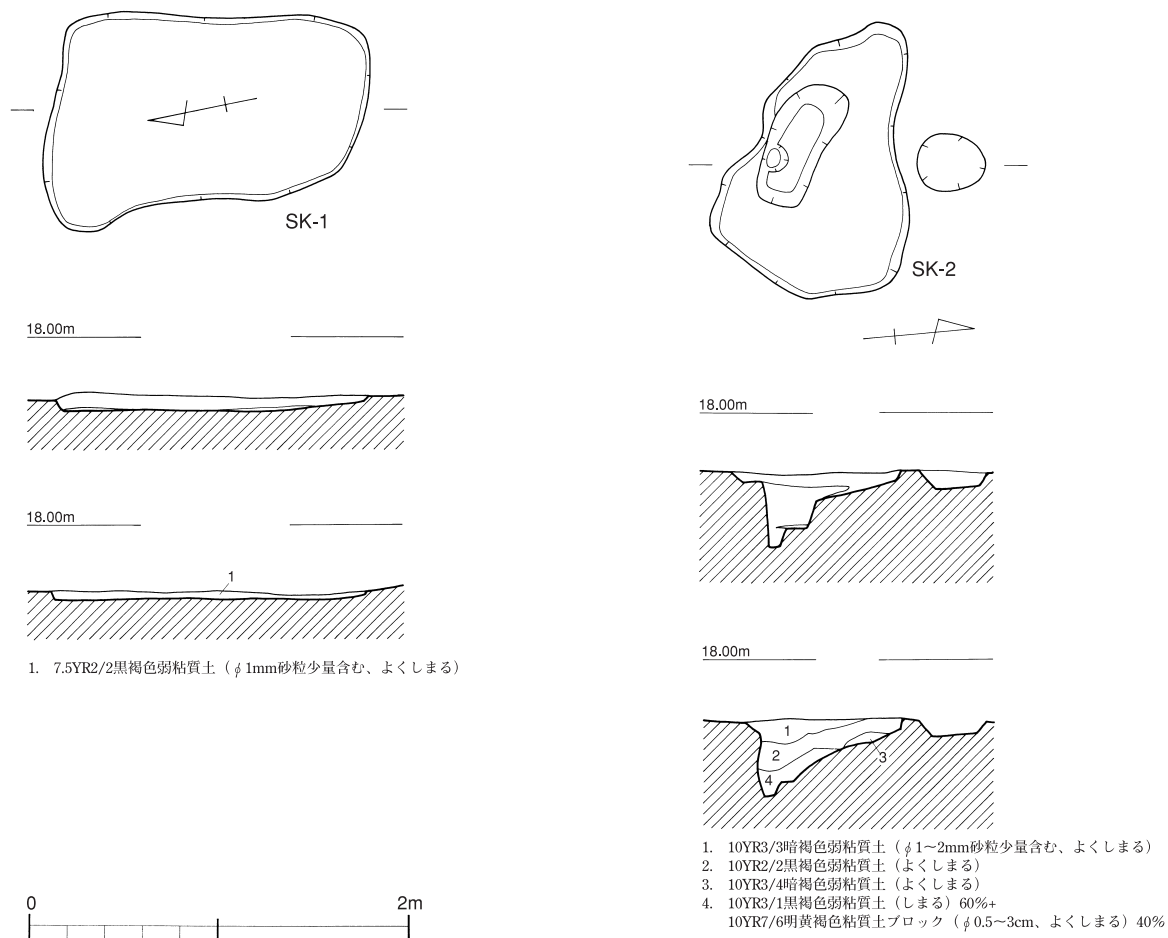
3. 土坑

SK-1 (第7図、図版3)

SK-1は、調査区東端で検出した。平面プランは、隅丸の不整長方形を呈する。規模は、長軸1.65m、短軸0.97mを測る。深さは、上面が削平されている為浅く、最深部で9cm、最浅部で3cmである。床面は、ほぼ平坦である。遺物は、確認されなかった。

SK-2 (第7図、図版3・4)

SK-2は、調査区東端、SK-1北側で検出した。平面プランは、不整三角形に近い形状を呈する。床面はほぼ平坦で若干中央部が深くなり、南壁寄りに平面形が隅丸長方形の掘り込みが確認された。規模は、長軸1.4m、短軸1m (最大部) を測る。深さは、掘り込み上面までの最深部で16.5cm、掘り込み床面まででは32cmを測る。また、掘り込み内南東部には小規模なピット状の掘り込みがあり、このピット底面までの深さでは40cmを測る。遺物は、確認されなかった。



第7図 力武内畑遺跡8 SK-1・2平・断面図 (S=1/40)

SK-3 (第8図、図版3・4)

SK-3は、調査区東端、SK-2北側で検出した。東側を攪乱に切られる。平面プランは、楕円形を呈する。

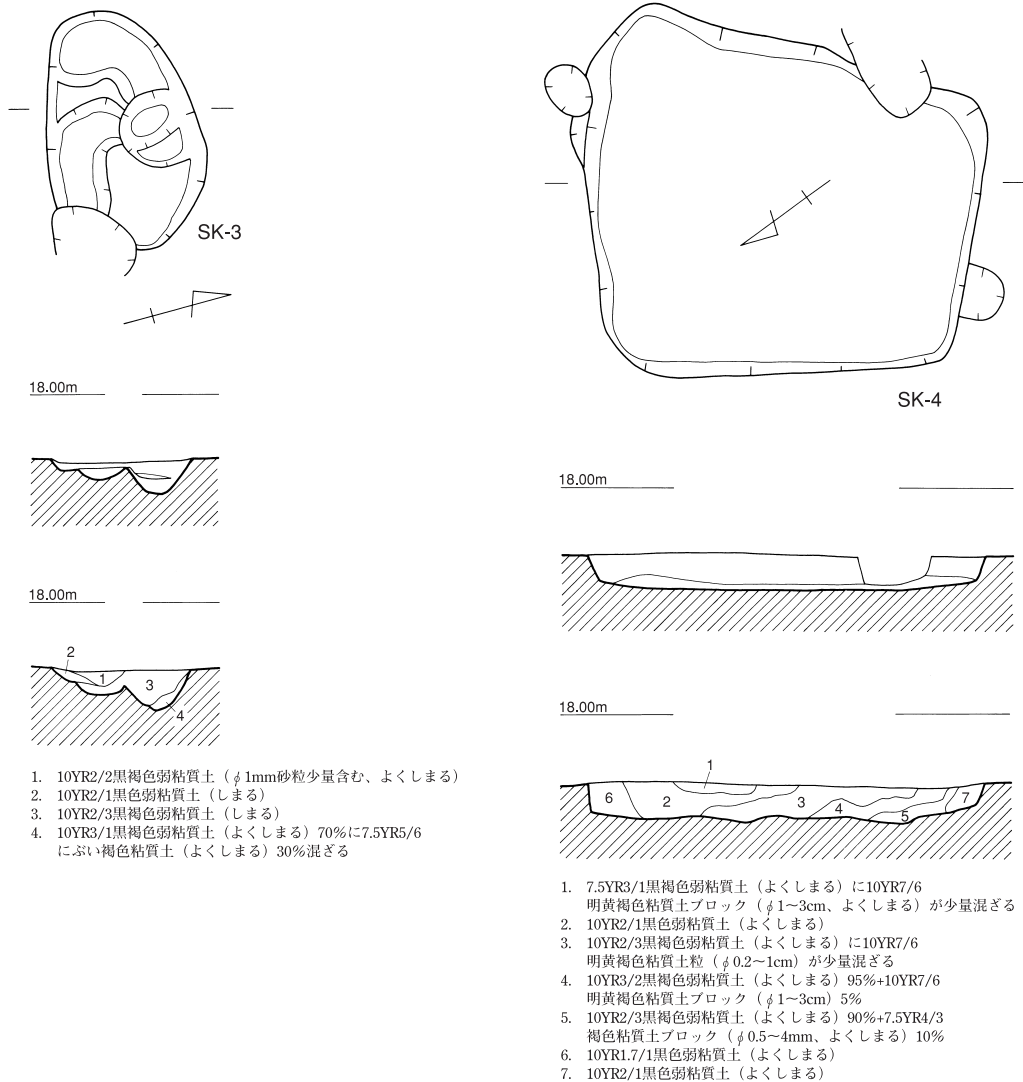
規模は、長軸1.28m、短軸0.83mを測る。床面は不整形で数段の段が付く。最深部は、北壁中央部直下の掘り込み内となり24cmを測る。最浅部は、北東部で6cmである。

出土遺物は、土師器小片が出土したが、図化するには至らなかった。

SK-4 (第8図、図版3)

SK-4は、調査区北東部、SK-3西側で検出した。他の土坑と同様に上面を削平され残存状況は悪く、南東部を攪乱に切られる。平面プランは、隅丸方形を呈する。規模は、長軸2.19m、短軸最大部1.95m、最短部1.45m、深さ最深部20cm、最浅部8cmを測る。

出土遺物は、弥生土器甕小片、土師器小片であるが、図化するには至らなかった。



第8図 力武内畑遺跡8 SK-3・4平・断面図 (S=1/40)

SK-5 (第4図、図版3)

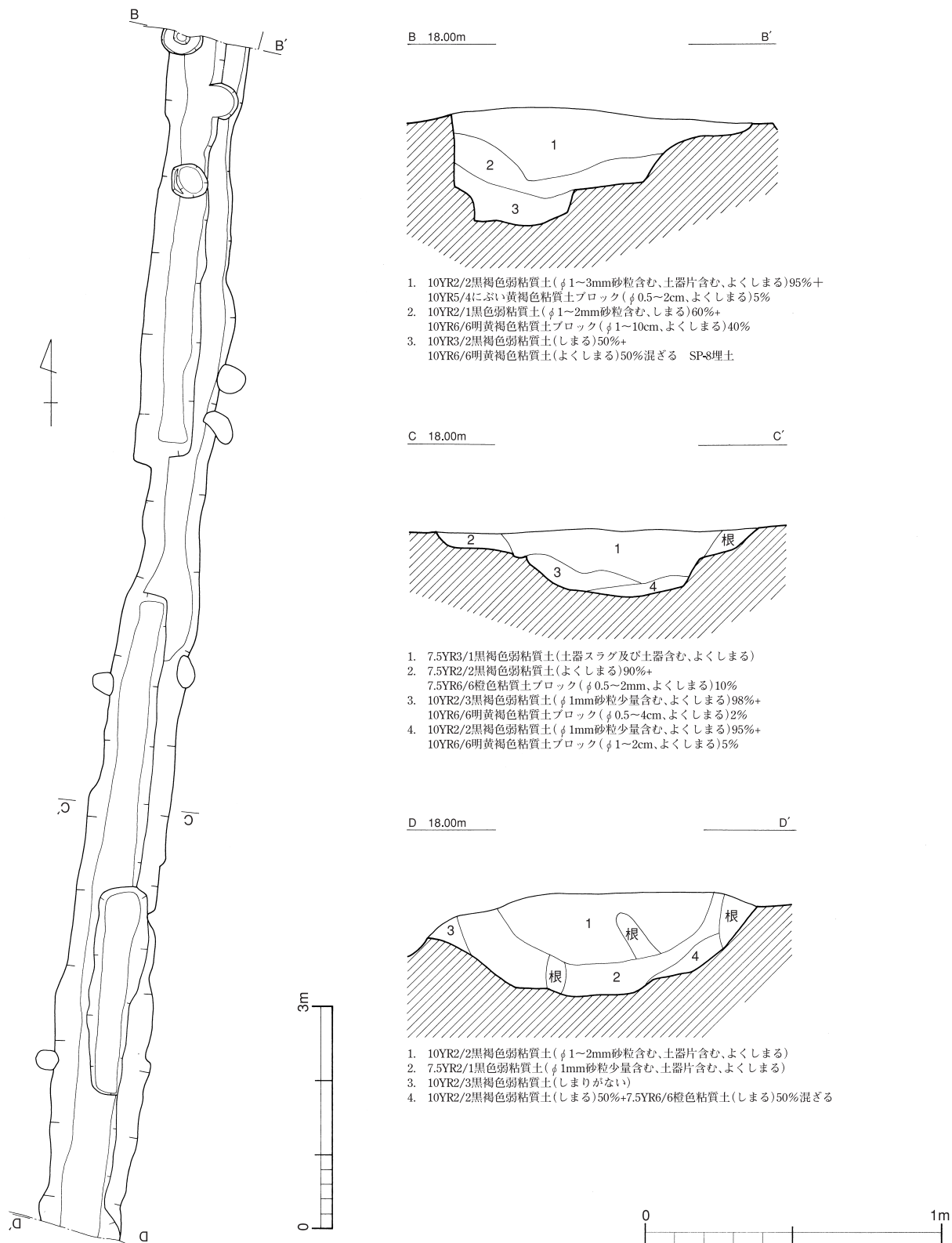
SK-5は、調査区北側拡張部、SB-2の柱穴であるSP-9東側で検出した。調査区にかかる為、全容は明らかではないが、検出した形状から隅丸方形もしくは隅丸長方形の平面プランを呈すると思われる。検出した規模は、長軸1.93m、短軸0.5m、深さ33cmを測る。床面は平坦で、南壁部分は若干オーバーハングしている。

出土遺物は、土師器小片が確認されたが、図化するには至らなかった。また、埋土中より燻し瓦が出土した事を考慮するとSK-5は近世以降のものである可能性が考えられる。

4. 溝状遺構

SD-1 (第9図、図版2・4)

SD-1は、調査区西側で南北方向に検出した。SB-2を切り、調査区外に更に伸びる。検出した規模は、長軸(南北方向)16.2m、短軸最大部1.32m、最小部0.75m、深さ最深部35cm、最浅部(テラス上面)6cmを測る。断面形は、緩やかなU字～逆台形に近い形状を呈し、中央部及び東壁側がテラス状になる。中央部のテラスをはさみ南北両側は一段落ちる。南側には、さらに掘り込みが見られ、最深部となる。南北両落ち込み内の床面は、共に平坦であり標高も殆ど差は見られない。また、各テラス面も平坦で、各面における傾



第9図 力武内畑遺跡8 SD-1平・断面図(平面:S=1/80、断面:S=1/20)

斜は見られない。これらの事からSD-1は、流路ではなく区画溝である事が考えられる。

遺物は、土師器高杯、須恵器坏蓋、青磁碗、土鍾の他、土師器小片が多数出土した。

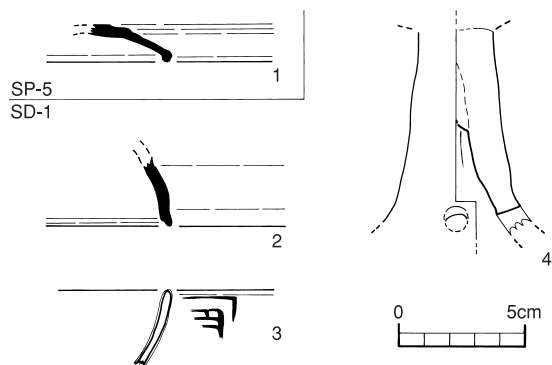
出土遺物（第10・11図、図版11）

2は、須恵器坏蓋の口縁部である。内外面共に回転ナデ調整が施される。胎土は、精良、焼成は良好で緑灰色（7.5GY5/1）を呈する。口唇部には、緩やかに段が付く。残存高は、2.7cmである。

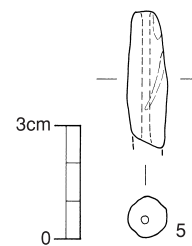
3は、青磁碗の口縁部である。内外面共に施釉、白緑色を呈する。焼成は良好であり、胎土には微細な黒色粒を含む。

4は、土師器高杯の脚部である。内外面共にナデ調整が施されるが、内面の屈曲部より脚端部側はヘラ削りが施される。焼成は良好で、にぶい褐色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には、 ϕ 1~3mm程度の砂粒を含む。下部には、穿孔が一箇所確認でき、本来2~3箇所の穿孔が施されていたものと思われる。

5は、土鍾である。外面には、ナデ調整が施される。残存長3.6cm、最大幅1.1cmを測る。胎土には、 ϕ 1mm程度の砂粒を極少量含む。焼成は良好で、にぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。



第10図 力武内畑遺跡 8 出土遺物実測図（S=1/3）



第11図 力武内畑遺跡 8 SD-1出土土製品実測図（S=1/2）

5. 柱穴

柱穴は、調査区内において44基検出した。44基の内9基がSB-1・2の柱穴となる。本項では遺物が出土したSP-11・12・13の3基について規模等の資料提示を行う事とする。また、調査区北東部に杭痕と思われる ϕ 10cm前後の小規模な円形ピットを3基確認した。

SP-11（第4図）

SP-11は、調査区東側、SK-1・2の間で検出した。攪乱に切られる。規模は、長軸34cm、短軸24cm、深さ64cmを測る。楕円形のプランを呈し、底面は平坦である。

出土遺物は染付の碗と思われる小片である。図化には至らなかったが、胎土は白色を呈し緻密である。内外面共に透明釉が施される。外面は、型紙刷と思われる、明青色の呉須による施文が見られる。

SP-12（第4図）

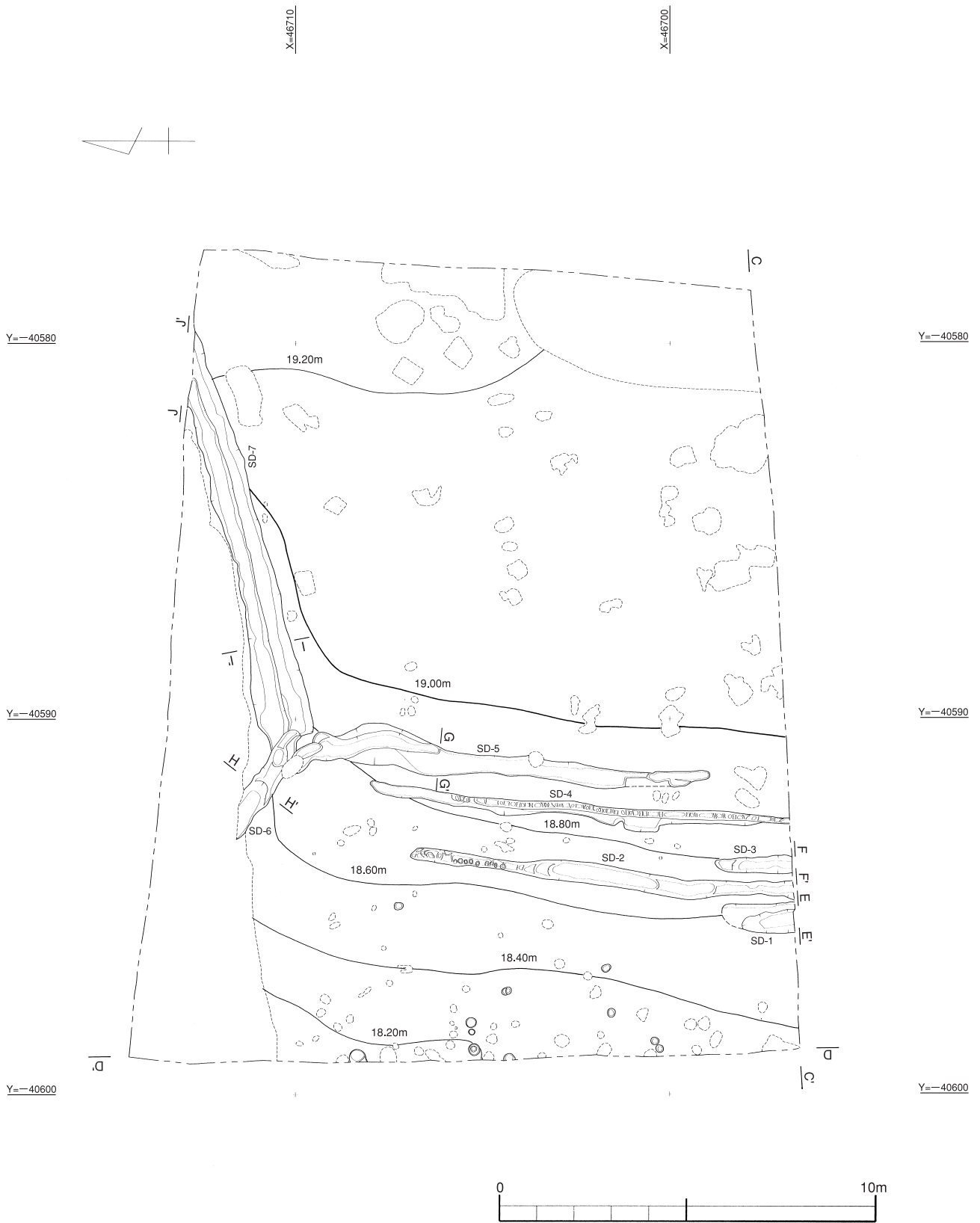
SP-12は、調査区南端中央部付近で検出した。規模は、長軸51cm、短軸41cm、深さ62cmを測る。隅丸方形に近い楕円形プランを呈する。底面は、円形プランを呈し平坦である。

出土遺物は、弥生土器甕胴部片である。図化するには至らなかった。外面は橙色（5YR6/6）、内面は明黄褐色（10YR6/6）を呈する。胎土には、 ϕ 1~2mmの砂粒を多く含む。内面は摩耗のため調整は不明であるが、外面はナデが施される。また、外面に煤の付着が見られる。

SP-13（第4図）

SP-13は、調査区南端、SD-1東側で検出した。攪乱に切られる。径28cmの円形プランを呈する。深さは26cmを測り、上端から10cm程度下に三日月状のテラスを一段有する。底面は平坦である。

出土遺物は、弥生土器甕の口縁部小片である。図化するには至らなかった。摩滅のため調整は不明であるが、内面に指頭痕が残る。胎土には ϕ 1mm程度の砂粒を含み、にぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。口唇部には、刻みが施される。



X=46710

X=46700

第12図 力武内畑遺跡 9 遺構配置図 (S=1/150)

第4章 力武内畑遺跡9の調査

1. 概要

調査地は、今回調査を行った3区画で最も西に位置し、西側には水田及び畑が広がる谷部が存在する。また、調査地自体も調査直前まで畑として利用され、植木も植えられており調査地東部分は著しく削平を受けていた。調査においても確認されたが、現在宅地となっている調査地北側は近年まで水田として利用されていたようである。この事から、本来調査地の標高は現在よりも高かったものと思われる。

調査は、重機により表土及び旧水田内の耕作土を除去した後、作業員による遺構検出、掘削を行った。基本層序は東側が表土の下、淡黄色粘質土地山、西側が表土、黒褐色弱粘質土の下、暗褐色ローム地山となる。西側においては、部分的に黒褐色弱粘質土の下に暗褐色弱粘質土の堆積も見られる。遺構は、地山面で検出した。遺構検出面の標高は、18.10～19.34mである。

検出した遺構は、溝状遺構7条、柱穴である。出土遺物は、弥生土器小片、土師器小片・皿、土師質土器小片・土鍋、瓦質土器小片、青磁碗、磁器合子、黒曜石剥片である。

調査面積は345m²、調査期間は平成18年10月23日（月）～同年11月17日（金）である。

2. 溝状遺構

SD-1（第12・15図、図版6）

SD-1は、調査区南西部、SD-2西側で検出した。南北方向に伸び、南側は調査区外へと至る。検出した規模は、南北方向1.39m、東西方向0.61m、深さ30cmである。また、SD-1東側に段が付き、検出状況からSD-1に伴うテラスと考えられ、テラスを含めると南北方向1.94m、東西方向0.8mとなる。上端からテラス面までの深さは、12cmである。底面は平坦であり、傾斜は殆ど見られない。断面形は、逆台形状を呈する。

出土遺物は、土師器坏と思われる口縁部のみである。小片のため図化するには至らなかった。

SD-2（第16図、図版5・6）

SD-2は、調査区西側傾斜部、SD-1東側で検出した。若干蛇行しながら南北方向に伸び、南側は調査区外へと至る。検出した規模は、南北方向10.25m、東西方向0.24～0.56m、深さ45cm（最深部）を測る。床面には段が付き中央部付近が最も深くなる。各段の高低差は、5～10cm程度である。また、北端部には5cm前後の凹凸が見られ、鋤により耕された痕跡と思われる。断面形は、方形～逆台形状を呈する。

出土遺物は土師器小片、砥石片であるが、図化するには至らなかった。

SD-3（第12・15図、図版6）

SD-3は、調査区西側傾斜部、SD-2東側で検出した。南北方向に伸び、南側は調査区外へと至る。検出した規模は、南北方向2.05m、東西方向0.5m（最大部）、深さ23cmを測る。北端部に1段テラスが付く。底面は平坦であり、緩やかに北に傾斜する。断面形は、緩やかなU字状を呈する。

遺物は土師器小片、黒曜石剥片が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

SD-4（第16図、図版5・6）

SD-4は、調査区西側傾斜変換点、SD-3東側で検出した。南北方向に伸び、南側は調査区外へと至る。検出した規模は、南北方向11.23m、東西方向0.15～0.58m、深さ15.5cmである。西側および北端部がテラス状となる。底面には、深さ5cm前後の凹凸がテラス面を除き全体に見られ、SD-2同様に鋤による耕作の痕跡と思われる。断面形は、逆台形状を呈する。

SD-4及びSD-2は平行して築かれ、共に底面に鋤による耕作の痕跡が見られることから畑の畝溝と考えられる。遺物は弥生土器小片及び土師器小片が出土したが、共に小片であり図化するには至らなかった。

SD-5（第12・15図）

SD-5は、調査区西側、SD-4東側で検出した。北側は、攪乱に切られる。緩やかに蛇行しながら南北方向に伸びる。検出した規模は、南北方向10.03m、東西方向0.2～1.12m、深さ7.5cm（南側）、25cm（北側）である。SD-6との切りあい部分の掘り込み及び、北側に見られる落ち込みは別遺構となる可能性も考えられ

るが、調査時においてはSD-5として検出、掘削した。また、SD-6との切り合いは攪乱により不明である。ただし、SD-6出土土師器坏に底部糸切りのもの、瓦質土器もあり、SD-5より出土している土師器小片よりは新しいと思われる為、SD-5はSD-6よりも古い段階の溝である可能性も窺える。

遺物は土師器小片、黒曜石剥片であるが、図化するには至らなかった。

SD-6 (第12・15図、図版5・6)

SD-6は、調査区北西部で検出した。南東から北西方向に伸びる。南東端はSD-7を切り、北西端は水田跡に切られる。検出した規模は、長さ3.3m、幅0.71m(最大部)、深さ46cm(最深部)である。底面は、北西に向かい段状に落ちる。断面形は、逆台形状を呈する。

出土遺物は、土師器坏・甕、瓦質挿鉢である。

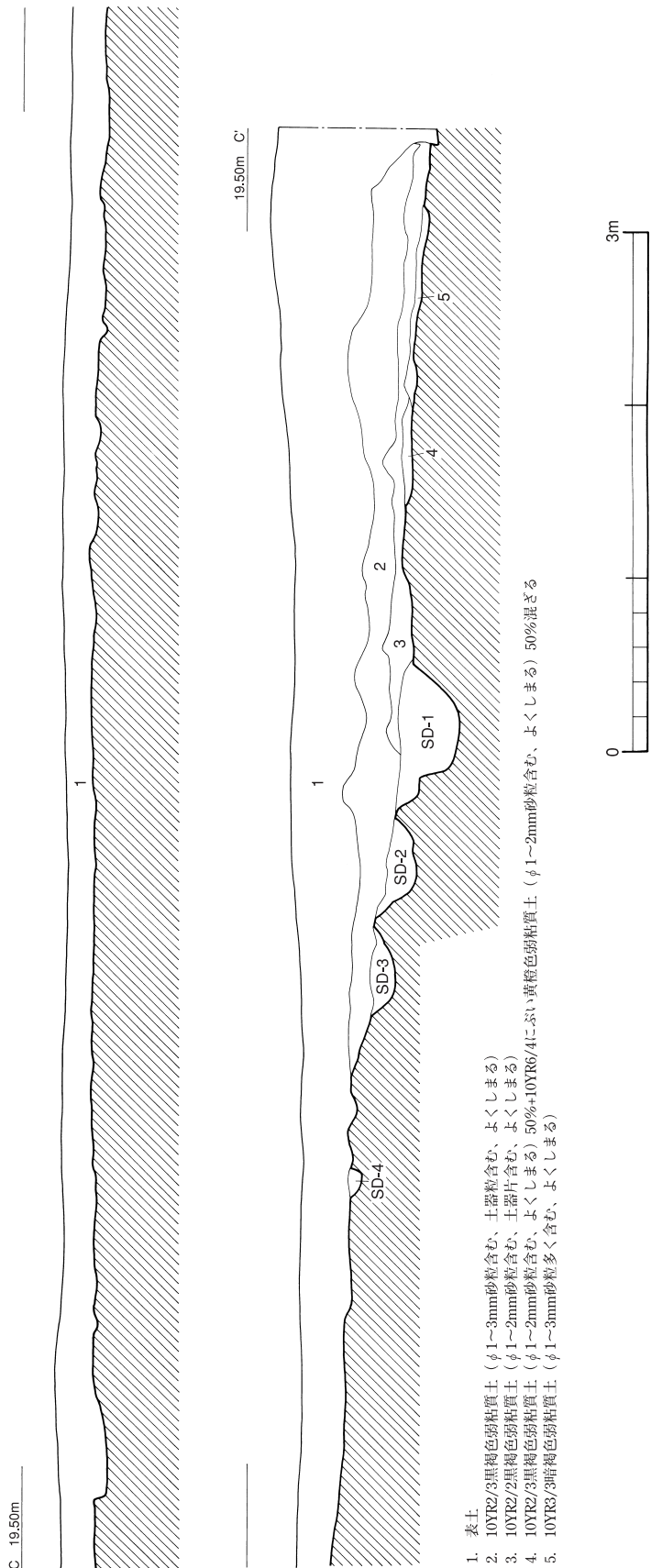
出土遺物 (第17図、図版11)

1は、土師器坏底部片である。底径5.6cm(復元)、残存高1.3cmを測る。内外面共に回転ナデが施される。胎土には橙色土粒を少量含み、焼成は良好で淡黄色(2.5Y8/4)を呈する。底部には糸切り痕が残る。14世紀の所産か。

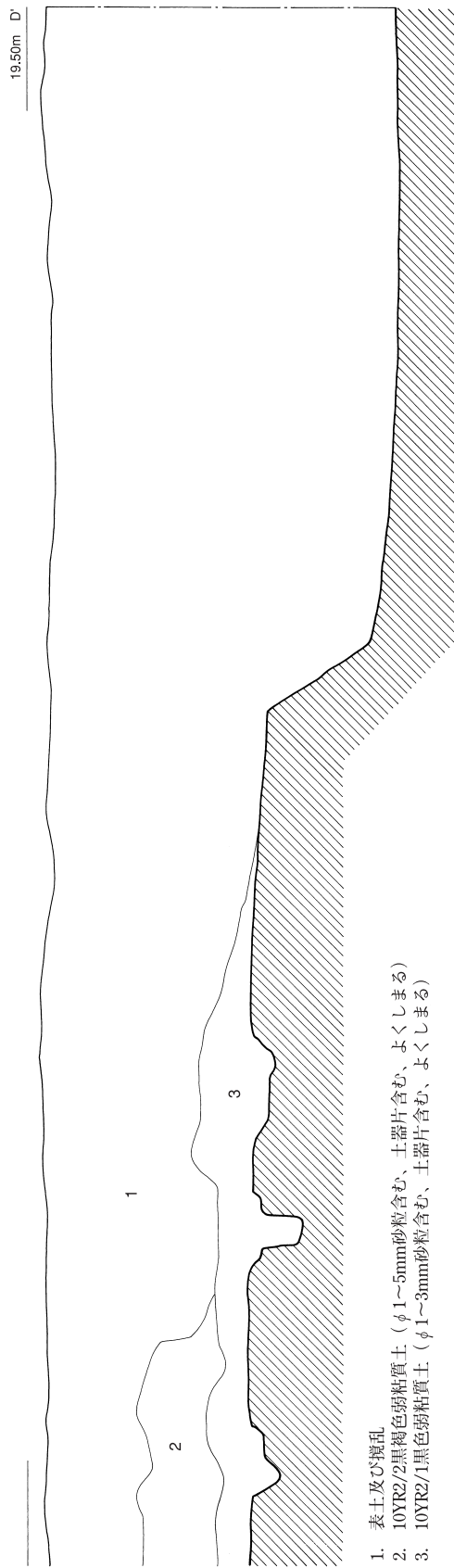
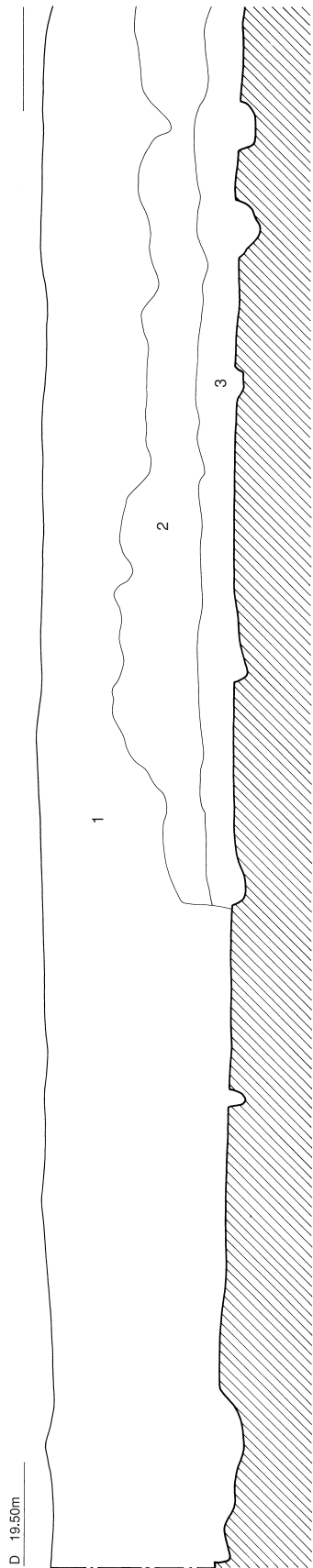
SD-7 (第12・15図、図版5・6)

SD-7は、調査区北側で北東から南西方向に検出した。南西部はSD-6、北側は水田跡に切れ、北東部は調査区外へと至る。検出した規模は、長さ11.56m、幅1.6m、深さ50cm(最深部)である。検出状況では、南側がテラス状になるが、ベルト土層(I-I')1~3層の堆積状況から掘り直しにより生じたものと考えられ、断面形は、初期が逆台形~長方形、掘り直し後は、浅いU字状を呈すると思われる。底面は平坦で、緩やかに南西に向かい傾斜する。

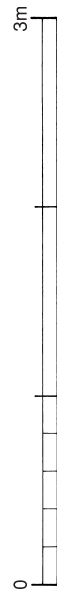
出土遺物は、土師器甕・坏、土師質土器土鍋、青磁碗、磁器合子、黒曜石剥片である。土師器甕・坏、黒曜石剥片は小片である為、図化するに至らなかった。



第13図 力武内畑遺跡9 調査区南壁土層断面図 (S=1/40)

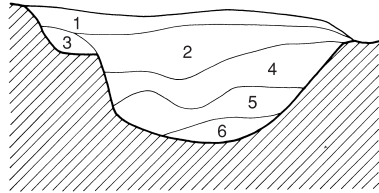


- 1. 表上及び攪乱
- 2. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ 1~5mm砂粒含む、土器片含む、よくしまる)
- 3. 10YR2/1黒色弱粘質土 (φ 1~3mm砂粒含む、土器片含む、よくしまる)



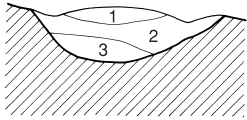
第14図 力武内畑遺跡9 調査区西壁土層断面図 (S=1/40)

E 18.80m SD-1 E'



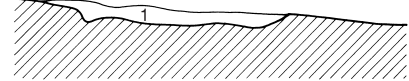
1. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (土器粒極少量含む、よくしまる)
2. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (よくしまる) 80%+
10YR7/8黄褐色砂土ブロック (φ0.5~3cm, φ1~3mm砂粒含む、土器粒極少量含む、よくしまる) 20%
3. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (粒子細かい、よくしまる)
4. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (よくしまる) 60%+
10YR8/6黄褐色粘質土ブロック (φ0.5~5cm, φ1~3mm砂粒含む、よくしまる) 40%
5. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
6. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (φ1~3mm砂粒少量含む、よくしまる) 90%+
10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック (φ1~4cm, φ1~2mm砂粒含む、よくしまる) 10%

F 18.90m SD-3 F'



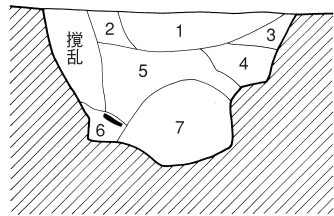
1. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)
2. 7.5YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる) 70%+
10YR7/6明黄褐色砂土ブロック (φ0.5~5cm, φ1~5mm砂粒、よくしまる) 30%
3. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (粒子細かい、よくしまる)

G 19.00m SD-5 G'



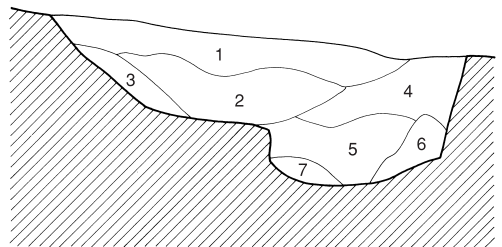
1. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)

H 18.80m SD-6 H'



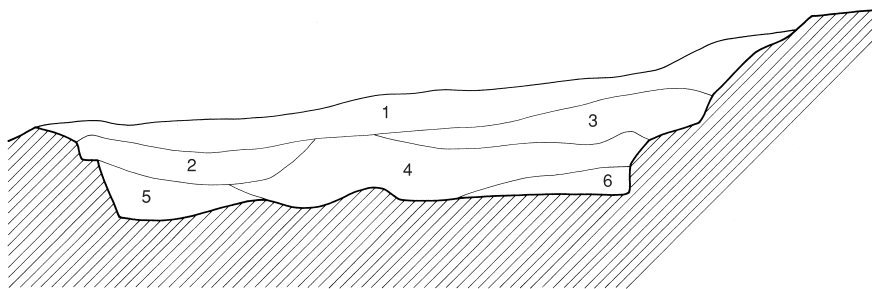
1. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
2. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
3. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
4. 10YR3/3暗褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる) 95%+
10YR7/6明黄褐色砂土ブロック (1~2cm大, φ1~2mm砂粒、しまる) 5%
5. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
6. 10YR7/8黄褐色粘質土 (よくしまる) 60%+
10YR3/3暗褐色弱粘質土 (土器片含む、よくしまる) 40%混ざる
7. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる) 80%+
10YR7/6明黄褐色砂土ブロック (φ0.5~2cm大、よくしまる) 20%

I 19.10m SD-7 I'

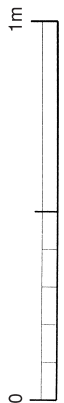


1. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
2. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
3. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる) 70%+
10YR7/4にぶい黄褐色粘質土 (よくしまる) 30%
4. 7.5YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
5. 10YR3/3暗褐色弱粘質土 (よくしまる) 90%+
10YR7/6明黄褐色粘質土粒 (φ0.2~1cm,よくしまる) 10%
6. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (φ1~3mm砂粒含む、よくしまる) 70%+
10YR6/4にぶい黄褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒含む、よくしまる) 30%混ざる
7. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (よくしまる) 60%+
10YR6/4にぶい黄褐色弱粘質土 (よくしまる) 40%混ざる

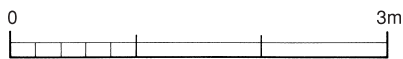
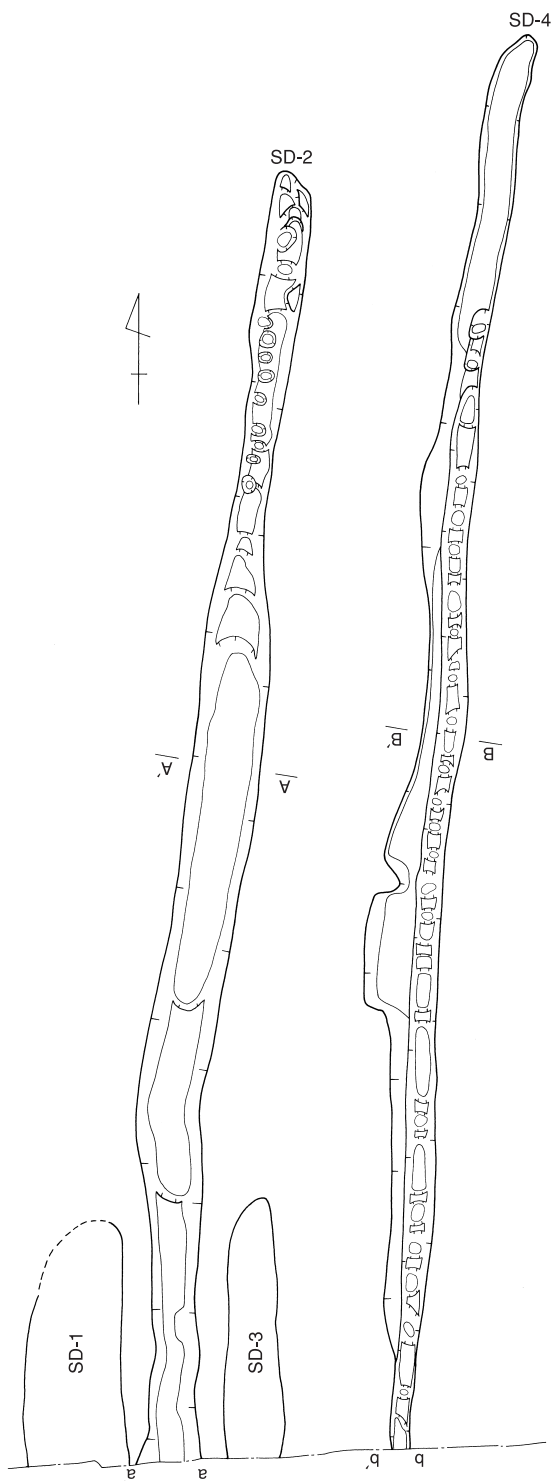
J 19.40m SD-7 J'



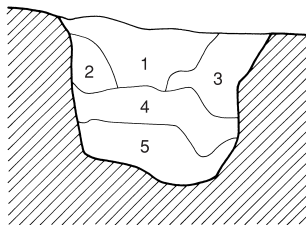
1. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (φ1~3mm砂粒含む、よくしまる)
2. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
3. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる) 90%+7.5YR1にぶい橙色弱粘質土 (よくしまる) 10%混ざる
4. 10YR3/3暗褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる) 90%+10YR6/4にぶい黄褐色弱粘質土 (よくしまる) 10%
5. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒含む、よくしまる) 80%+7.5YR7/6橙色粘質土 (よくしまる) 20%混ざる
6. 10YR3/3暗褐色弱粘質土 (よくしまる) 40%+7.5YR5/4にぶい褐色弱粘質土 (よくしまる) 60%混ざる



第15図 力武内畑遺跡9 SD-1・3・5・6・7土層断面図 (S=1/20)

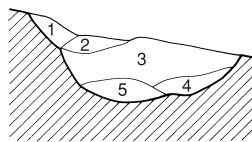


A 18.90m _____ A'



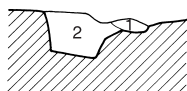
1. 7.5YR2/3極暗褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒含む、よくしまる) 95%+
10YR7/6明黄褐色砂土ブロック (φ5cm大、φ1~5mm砂粒、しまる) 5%混ざる
2. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる) 90%+
7.5YR6/6橙色粘質土ブロック (φ1~2cm大、よくしまる) 10%
3. 7.5YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)
4. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、土器小片含む、よくしまる) 90%+
10YR8/6黄橙色粘質土ブロック (φ1~3cm大、φ1mm砂粒少量含む、よくしまる) 10%
5. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)

a 18.90m _____ a'



1. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ1~3mm砂粒多く含む、よくしまる)
2. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒含む、よくしまる)
3. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒極少量含む、粒子細かい、よくしまる) 95%+
7.5YR6/8橙色砂土ブロック (φ0.5~2cm、φ1~3mm砂粒、よくしまる) 5%
4. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (粒子細かい、よくしまる)
5. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ1~3mm砂粒少量含む、よくしまる)

B 18.90m _____ B'

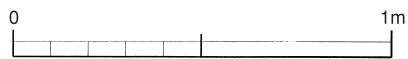


1. 7.5YR4/4褐色弱粘質土 (よくしまる)
2. 7.5YR3/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)

b 18.90m _____ b'



1. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
2. 7.5YR3/3暗褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)



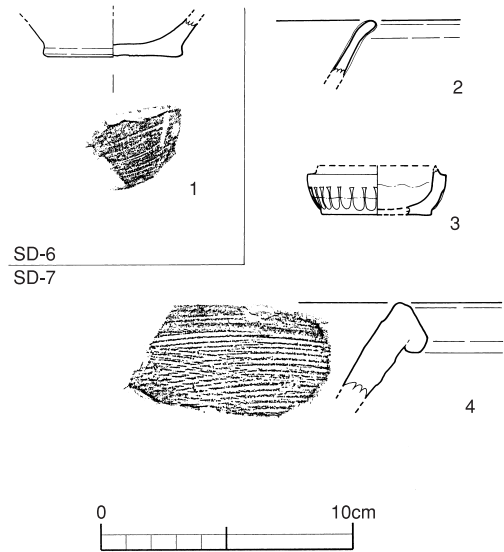
第16図 力武内畑遺跡9 SD-2・4平・断面図 (平面：S=1/60、断面：S=1/20)

出土遺物 (第17図、図版11)

2は、青磁碗の口縁部片である。残存高は2.3cmを測り、口唇部は外反する。胎土は、灰白色を呈し少量の黒色粒を含む。焼成は良好で、明緑色を呈する。

3は、磁器合子片である。底径4.4cm (復元)、残存高1.8cmを測る。整形は型押し整形であり、口縁部には横方向にナデが施される。口縁部は釉剥ぎにより、胴部外面から底部は無釉で露胎する。胎土は精良で灰白色を呈する。焼成は良好で、施釉部分においては明緑灰色を呈する。内面に貫入が見られる。

4は、土師質土器土鍋の口縁部片である。残存高3.8cmを測る。口唇部は、工具によるナデが施され、外面はタタキ、内面はハケメ調整が施される。胎土には1～3mm大の白色砂粒を含む。焼成は良好で、内外面共に橙色 (7.5YR6/6) を呈する。外面に煤の付着が見られる。



第17図 力武内畑遺跡9 出土遺物実測図 (S=1/3)

3. 柱穴 (第12図)

柱穴は、調査区西端部でのみ検出された。検出した柱穴は10基である。柱穴は、散在し建物跡となるものは確認されなかった。規模は、径15～45cm程度の円もしくは楕円形プランを呈し、深さ4～19cmである。柱穴から遺物は出土せず、時期は不明である。

第5章 力武内畑遺跡10の調査

1. 概要

調査地は、力武内畑遺跡8・9の中間に位置する。調査区の設定は、市道を挟む事から東側をA区、西側をB区とした。A・B区共に調査直前まで畑として利用されており削平を受けている事が想定され、A区においては全域で、B区においては西端部が削平を受けていた。

調査は、A区より着手した。A区は、重機により表土及び堆積土除去の後、作業員による遺構検出、掘削を行った。表土掘削時において調査区西端部が近年まで水田として利用され、遺構検出面より更に削平を大きく受けている事が確認された為、水田部分を廃土置き場として設定した。基本層序は、表土、黒褐色弱粘質土の下、東端部では褐色ローム地山、他は黄褐色粘質土地山となる。遺構は、地山面で検出した。遺構検出面の標高は、17.08～17.51mである。B区もA区同様に、重機により表土及び堆積土除去の後、作業員による遺構検出、掘削を行った。基本層序は、西側では表土の下、橙色粘質土地山、東側では表土、黒褐色弱粘質土、黒色弱粘質土の下、暗褐色ローム地山となる。遺構は、地山面で検出した。遺構検出面の標高は、17.71～19.49mである。また、遺構番号の設定は、A・B区通した通し番号で設定した。

検出した遺構は、土坑7基、溝状遺構4条、柱穴67基である。出土遺物は、弥生土器壺・甕、土師器皿、須恵器坏、土師質土器播鉢、青磁碗、染付碗、投弾（円礫）、黒曜石剥片、安山岩剥片である。

調査面積は、A・B区合わせ513.1m²である。調査期間は平成19年1月9日（火）～同年2月1日（木）である。

2. 土坑

SK-1（第18図、図版8）

SK-1は、A区南東隅で検出した。調査区東壁・南壁にかかる為、全容は明らかではない。検出した規模は、長軸1.81m、短軸0.55m、深さ25cmを測る。床面は平坦で、緩やかに北東に向かい傾斜する。

遺物は、確認されなかった。

SK-2（第21図、図版8）

SK-2は、B区北東部で検出した。SP-23・24を切る。検出した規模は、南北方向1.3m、東西方向1.09m、深さ12.5cmを測る。平面形は、不整楕円形を呈する。床面は平坦で、緩やかに東に向かい傾斜する。

遺物は、確認されなかった。

SK-3（第21図、図版8）

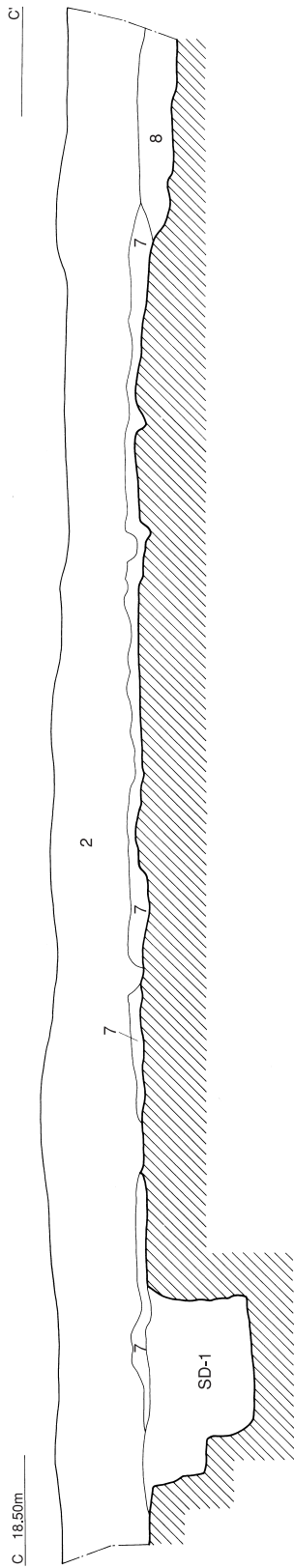
SK-3は、B区北側中央部、SK-6南側で検出した。検出した規模は、長軸2m、短軸1.02m、深さ12cmを測る。平面形は不整長方形を呈し、床面は平坦で東に向かい緩やかに傾斜する。床面北東部には一段掘りこみが見られる。

遺物は、確認されなかった。

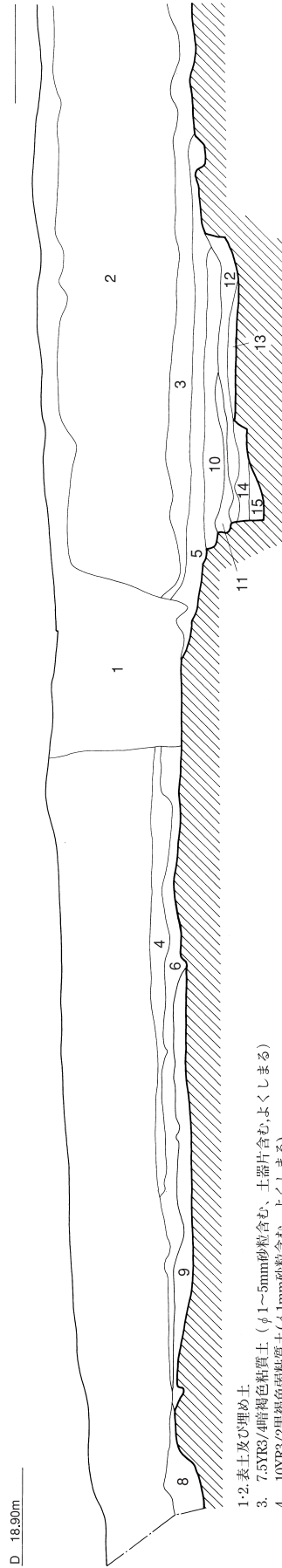
SK-4（第22図、図版9・10）

SK-4は、主軸をN-15°-Wに取る小型の土壙墓である。B区西側中央部で検出した。南側を攪乱に切られる。検出した規模は、長軸86cm、短軸38cm、深さ43.5cm（最深部）を測り、平面形は不整長方形を呈する。床面には段が付き、南側が深くなる。床面プランは、北側（上段）が隅丸長方形を呈し、南部分が北に向かい湾曲する。南側（下段）は、不整円形を呈する。また、北側（上段）は平坦で緩やかに南に向かい傾斜し、南側（下段）はほぼ平坦であるが中央部がやや窪む。段の高低差は、4～6.5cmである。土坑の形状から北側が頭位方向と考えられ、上段の中央よりやや南部分の床面直上で完形の青磁碗が内面を上方に向け出土し、頭部の下に置かれていた可能性が窺える。また、青磁碗は若干南に傾いた状態で出土した。

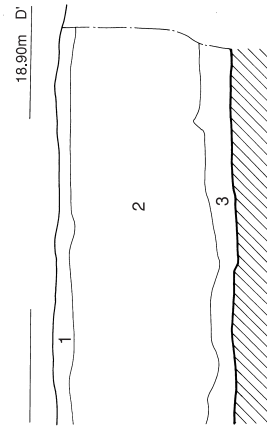
出土遺物は、青磁碗のみである。



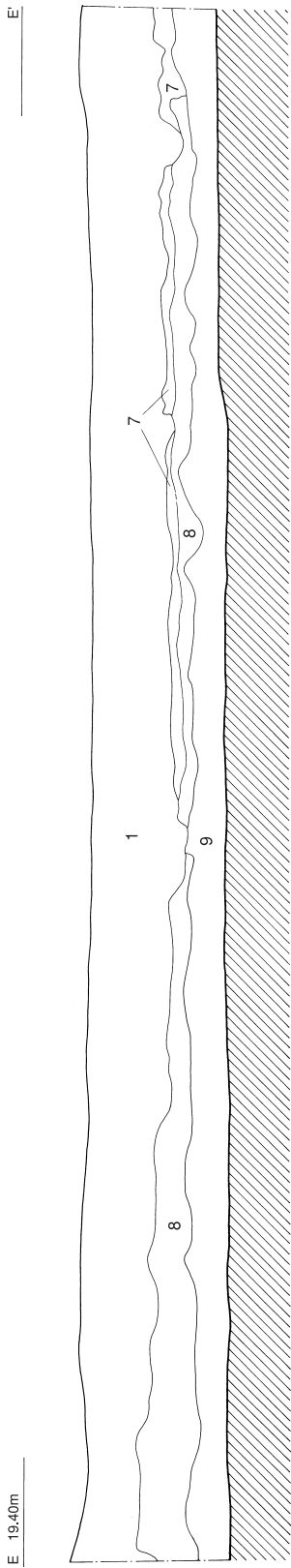
調査区東壁
調査区南壁



- 1-2. 表土及び埋め土
- 3. 7.5YR3/4暗褐色粘質土 (φ 1~5mm砂粒含む、土器片含む、よくしまる)
- 4. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ 1mm砂粒含む、よくしまる)
- 5. 7.5YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
- 6. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (φ 1~2mm砂粒含む、よくしまる)
- 7. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (φ 1~3mm砂粒含む、よくしまる)
- 8. 7.5YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ 1~3mm砂粒含む、よくしまる) SK-1埋土
- 9. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ 1mm砂粒少量含む、よくしまる)
- 10. 10YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる) SD-1埋土
- 11. 10YR2/3黒褐色粘質土 (よくしまる) SD-1埋土
- 12. 10YR4/2灰黄褐色粘質土 (よくしまる) SD-1埋土
- 13. 10YR4/1褐灰色粘質土 (よくしまる) SD-1埋土
- 14. 10YR2/2黒褐色粘質土 (φ 1~5mm砂粒多く含む、よくしまる) SD-1埋土
- 15. 10YR3/2灰黄褐色粘質土 (φ 1~2mm砂粒少量含む、よくしまる) SD-1埋土

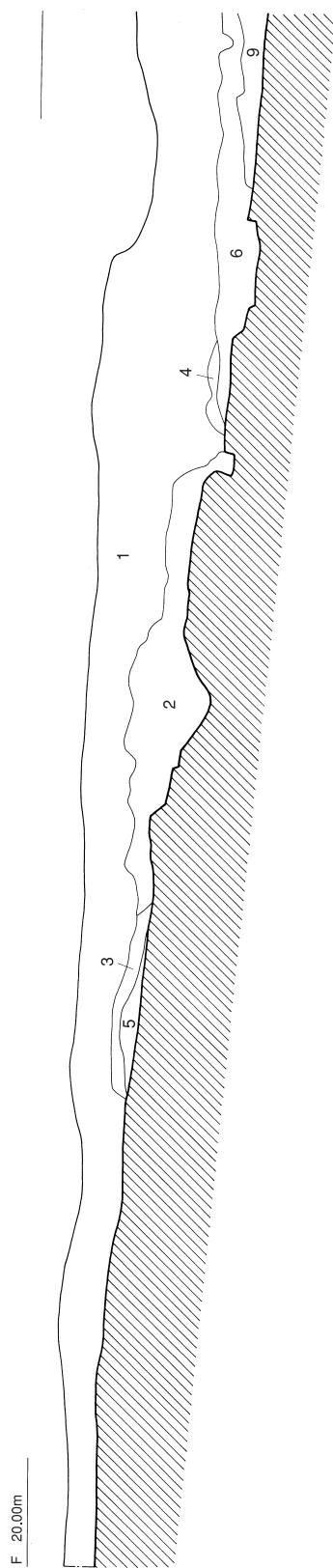


第19図 力武内畑遺跡10A区 調査区東・南壁土層断面図 (S=1/60)

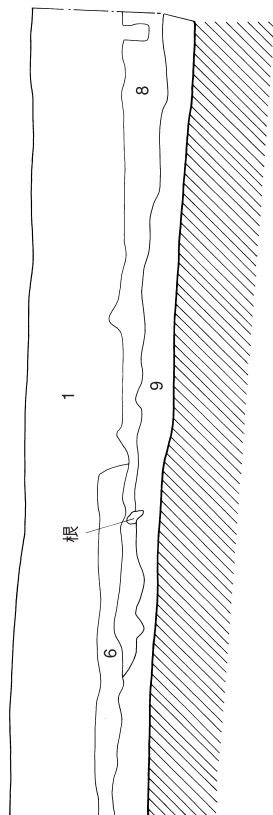


調査区東壁

調査区北壁



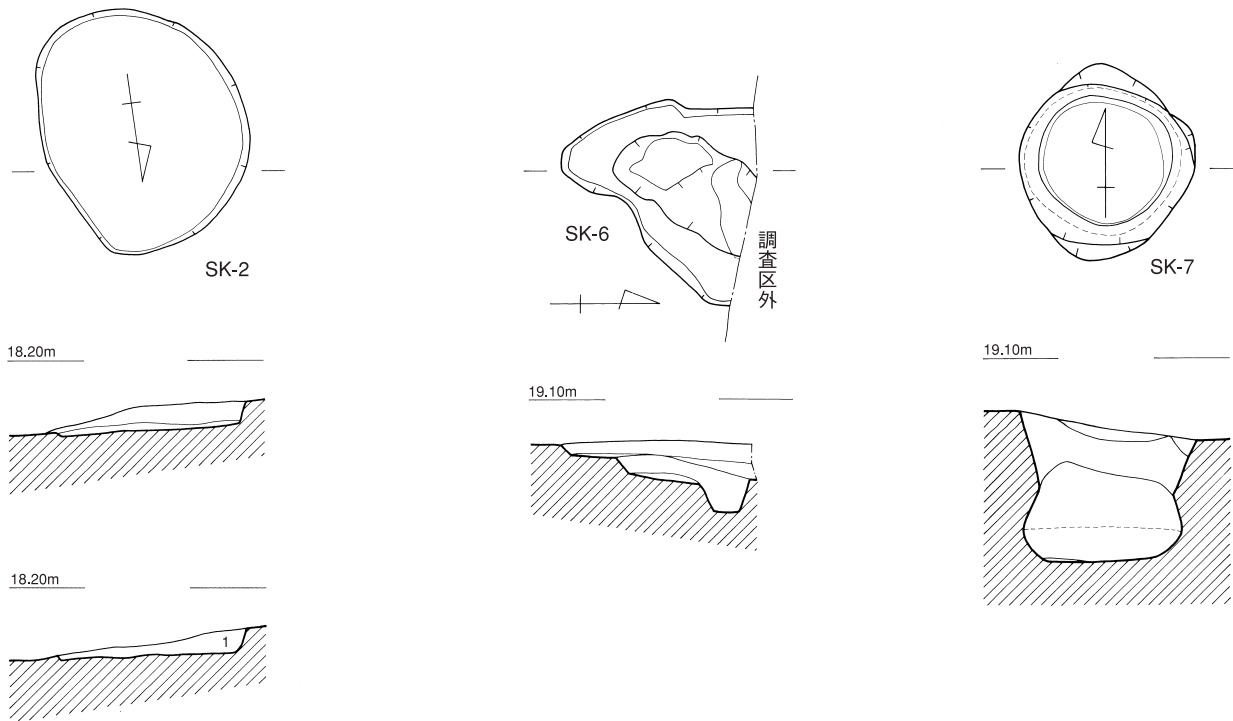
20.00m F



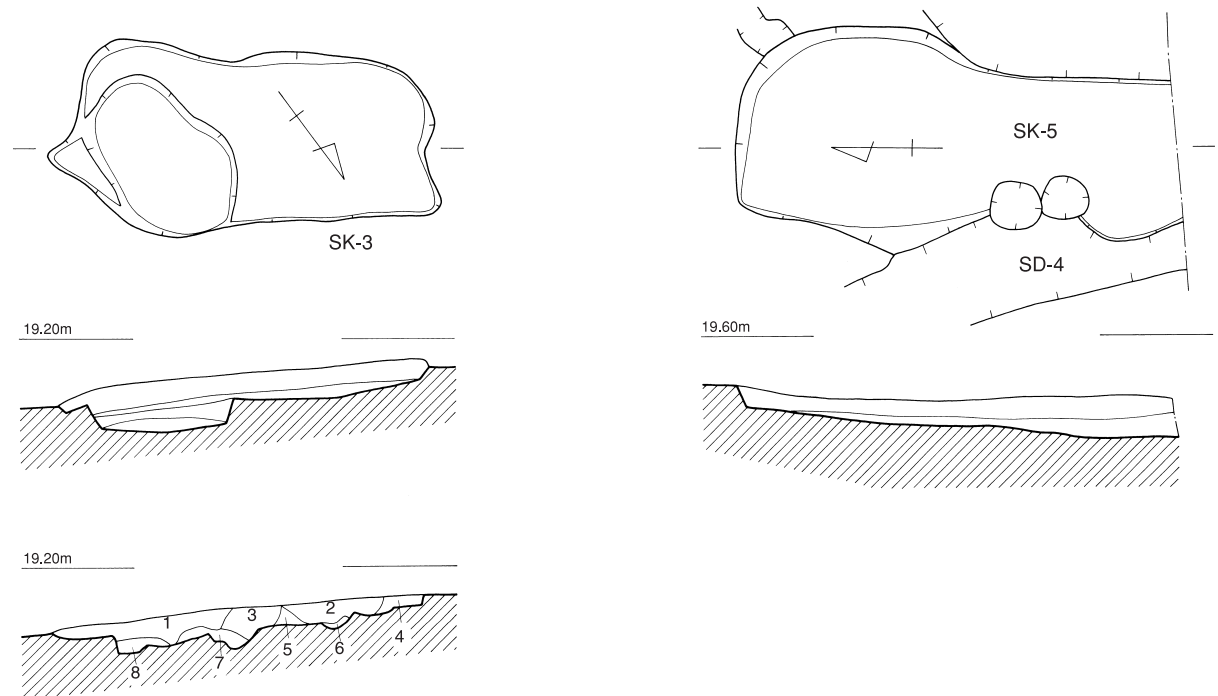
- 表土
1. 7.5YR2/1黒色弱粘質土 (φ 1mm砂粒含む、よくしまる)
 2. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ 1mm砂粒含む、よくしまる)
 3. 10YR2/1黒色弱粘質土 (φ 1mm砂粒少量含む、よくしまる)
 4. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (φ 1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
 5. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (φ 1~3mm砂粒含む、よくしまる)
 6. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (土器片含む、よくしまる)
 7. 10YR2/1黒色弱粘質土 (土器片含む、よくしまる)
 8. 10YR1/7黒色弱粘質土 (土器片含む、よくしまる)



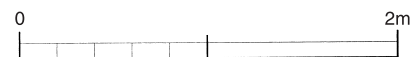
第20図 力武内畑遺跡10B区 調査区東・北壁土層断面図 (S=1/60)



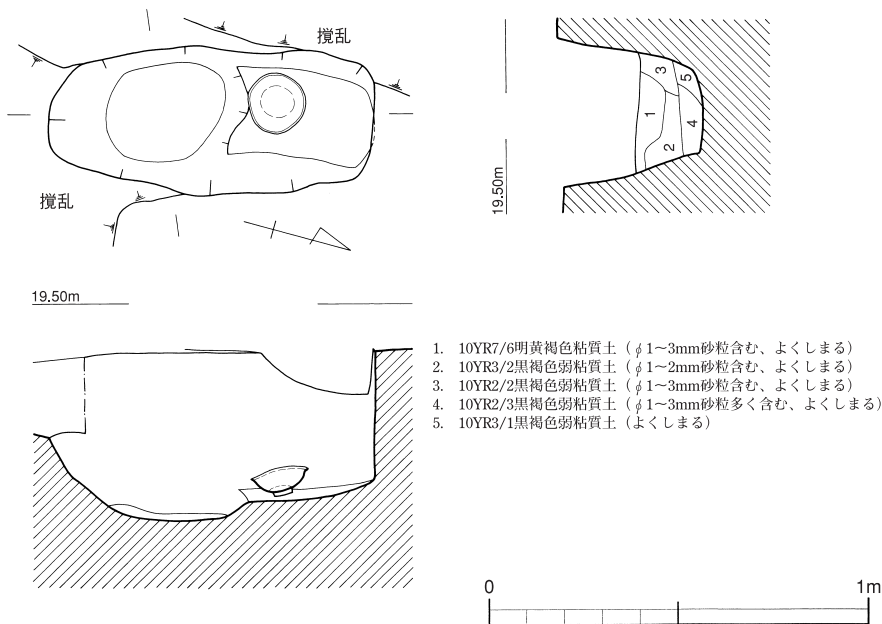
1. 7.5YR1.7/1黒色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、土器片含む、水分多く含む、よくしまる)



- 1・2. 10YR2/1黒色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)
- 3. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)
- 4. 10YR3/3暗褐色粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)
- 5. 10YR3/4暗褐色粘質土 (φ1~2mm砂粒少量含む、よくしまる)
- 6. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)
- 7. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (φ1~3mm砂粒含む、よくしまる)
- 8. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)



第21図 力武内畑遺跡10B区 SK-2・3・5・6・7 平・断面図 (S=1/40)



第22図 力武内畑遺跡10B区 SK-4平・断面図 (S=1/20)

1. 10YR7/6明黄褐色粘質土 (ϕ 1~3mm砂粒含む、よくしまる)
2. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (ϕ 1~2mm砂粒含む、よくしまる)
3. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (ϕ 1~3mm砂粒含む、よくしまる)
4. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (ϕ 1~3mm砂粒多く含む、よくしまる)
5. 10YR3/1黒褐色弱粘質土 (よくしまる)

出土遺物 (第26図、図版13)

17は、青磁碗である。口縁部は外反する。口径15.3cm、高台径5.3cm、器高6.3cmを測る。胎土は ϕ 1mm程度の砂粒を少量含むが精良で灰白色、内外面は青磁釉による施釉の為、明緑灰色を呈する。見込みには、ヘラ描きによる施文、足付きハマの目跡が2箇所残る。高台は、削り出しによる整形である。高台外面は、一部露胎、畳み付け及び内面は一部に釉がかかるが、施釉の際に高台に釉が流れたものと思われる。中世の所産である。

SK-5 (第21図、図版9)

SK-5は、B区南西隅で検出した。SD-4、SP-65・66、攪乱に切られ、南側は調査区外に至る。不整長方形プランを呈すると思われる。検出した規模は、長軸2.32m、短軸1.2m、深さ17cmを測る。床面には、若干の凹凸が見られる。

遺物は、須恵器環の口縁部、底部が出土した。

出土遺物 (第26図、図版13)

18は、須恵器環の底部である。残存高1.9cmを測る。胎土は、 ϕ 2mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好であり、暗緑灰色 (10GY4/1) を呈する。高台は底端部付近に付き、断面長方形で端部は丸味を持ち、やや上方に摘み出した様な形状を呈する。内外面共に、回転ナデ調整が施される。

SK-6 (第21図、図版9)

SK-6は、B区北端部中央、SK-3北側で検出した。北側は、調査区外へと伸びる。検出した規模は、長・短軸共に1.04m、深さ25.5cm (最深部) を測る。床面は、北に向かい2段落ち、北端部が最深部となる。各段は平坦であるが、最上段は北に向かい緩やかに傾斜する。

遺物は、確認されなかった。

SK-7 (第21図、図版9)

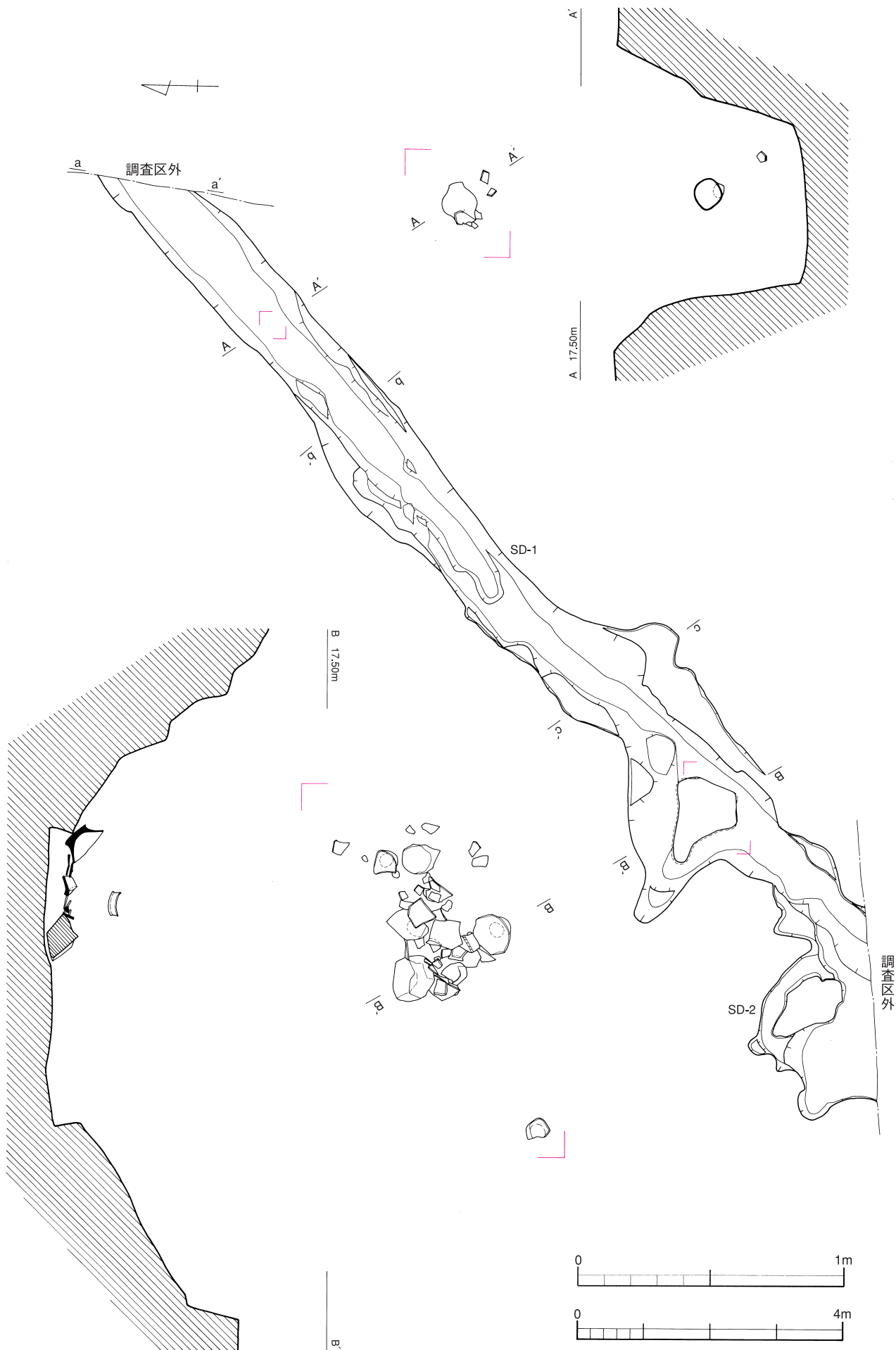
SK-7は、B区中央、SD-3西側で検出した。検出した規模は、長軸1.04m、短軸0.92m、深さ76.5cmを測る。平面形は円形を呈する。断面形が、上端から中央部にかけて狭くなり、下部は袋状に広がる。床面は、平坦である。土坑の形状から、貯蔵穴の可能性も窺えるが、土坑内埋土から遺物の出土は見られなかった。また、現在周辺住宅には数多く井戸が掘られており湧水の豊富な地域である事から、井戸の可能性も考慮したが、床面からの湧水は見られず、井戸棒などの痕跡も見られなかった。

遺物は、確認されなかった。

3. 溝状遺構

SD-1 (第23・24図、図版7・8・10)

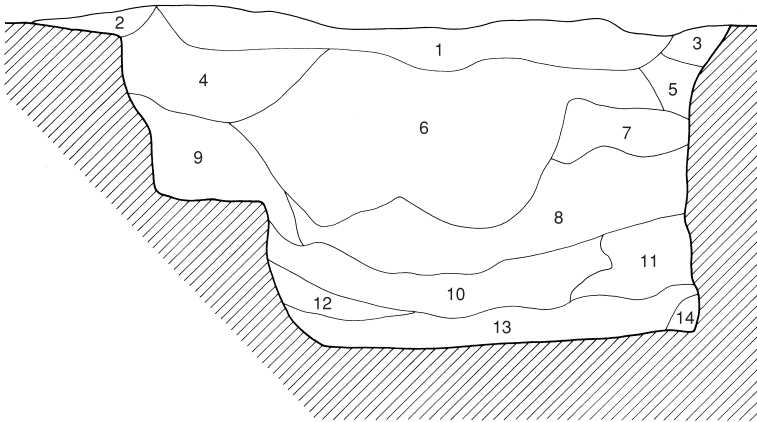
SD-1は、A区東側で北東~南西方向に検出した。長軸両端部は、調査区外へと伸びる。検出した規模は、長軸16.76m、幅0.84~1.36m、深さ48~74cmである。断面形は、逆台形状を呈する。床面は、中央より北東側が一段下がる。また、南西部に不整形な掘り込みが確認された。南西部 (上段) 及び北西部 (下段) の高低差は6.5~18cmである。各段共に平坦であり、殆ど傾斜は見られない。先述したようにSD-1は、力武内



第23図 力武内畑遺跡10A区 SD-1平・断面図（平面：S=1/80、遺物・断面：S=1/20）

a 17.80m

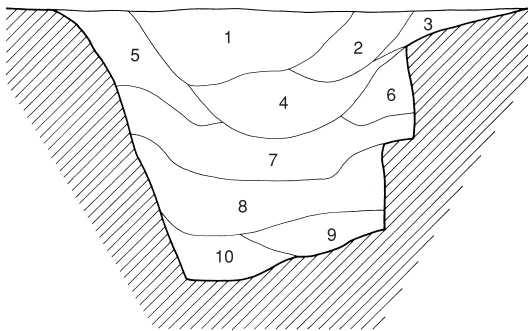
a'



1. 10YR2/1黒色弱粘質土 (ϕ 1mm砂粒含む、よくしまる)
2. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
3. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
4. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
5. 10YR3/3暗褐色弱粘質土 (よくしまる)
6. 7.5YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
7. 7.5YR3/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
8. 10YR2/2黒褐色粘質土 (ϕ 1~3mm砂粒含む、よくしまる)
9. 10YR2/1黒色粘質土 (よくしまる)
10. 10YR2/1黒色粘質土 (ϕ 1mm砂粒多く含む、よくしまる) 80%+
10YR6/8明黄褐色粘質土 (よくしまる) 20%混ざる
11. 10YR6/8明黄褐色粘質土 (よくしまる) 70%+
10YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる) 30%混ざる
12. 10YR3/1黒褐色粘質土 (よくしまる)
13. 7.5YR2/1黒色粘質土 (よくしまる)
14. 10YR6/2灰黄褐色粘質土 (砂粒多く含む、よくしまる)

b 17.60m

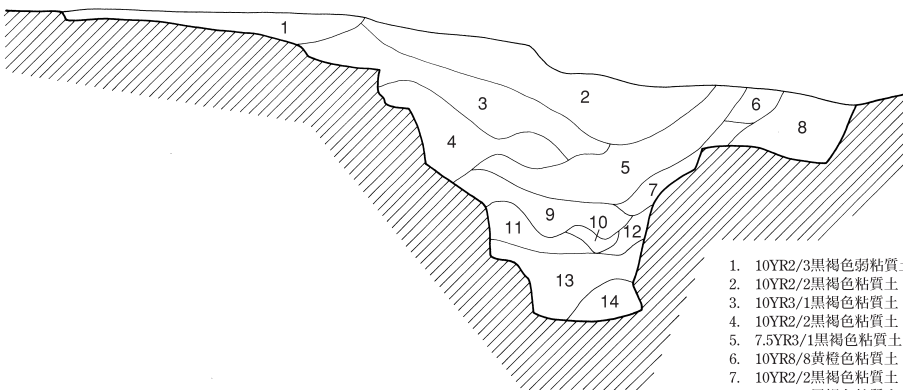
b'



1. 10YR 2/3黒褐色粘質土 (よくしまる)
2. 10YR3/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
3. 10YR3/3暗褐色粘質土 (よくしまる)
4. 10YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
5. 10YR3/1黒褐色粘質土 (よくしまる)
6. 10YR3/1黒褐色粘質土 (よくしまる)
7. 10YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる) に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロックが混ざる
8. 10YR3/1黒褐色粘質土 (ϕ 1~2mm砂粒多く含む、よくしまる) 70%+
10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック (ϕ 0.5~10cm、よくしまる) 30%
9. 10YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる) 90%+
10YR6/8明黄褐色粘質土ブロック (ϕ 2~5cm、よくしまる) 10%
10. 10YR2/1黒色粘質土 (よくしまる)

c 17.60m

c'



1. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
2. 10YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
3. 10YR3/1黒褐色粘質土 (よくしまる)
4. 10YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
5. 7.5YR3/1黒褐色粘質土 (よくしまる)
6. 10YR8/8黄褐色粘質土 (よくしまる)
7. 10YR2/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
8. 10YR3/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
9. 10YR4/2灰黄褐色粘質土 (ϕ 1~2mm砂粒多く含む、よくしまる)
10. 10YR4/1褐灰色粘質土 (よくしまる)
11. 10YR4/1褐灰色粘質土 (ϕ 1mm砂粒含む、よくしまる) 50%+
10YR7/6明黄褐色粘質土 (よくしまる) 50%混ざる
12. 10YR3/1黒褐色粘質土 (ϕ 1mm砂粒含む、よくしまる)
13. 10YR2/1黒色粘質土 (ϕ 1~3mm砂粒含む、よくしまる)
14. 10YR6/2灰黄褐色粘質土 (よくしまる)



第24図 力武内畑遺跡10A区 SD-1土層断面図 (S=1/20)

畑遺跡4において確認されたSD-10へと繋がり、床面に傾斜が無い事や、埋土の堆積状況から流路ではなく区画溝であると考えられる。

遺物は、弥生土器小壺、壺、甕、鉢、投弾（円礫）が確認された。小壺は、北東部で床面より30cm程度浮いた状態で出土した。また、南西部掘り込み東側に土器溜りが確認され、出土土器及び投弾の多くが土器溜りより確認された。

出土遺物（第26図、図版12・13）

1は、弥生土器小壺である。口縁部を欠損している為、口径は不明である。底径5.4cm、残存高13.1cmを測る。頸部と胴部の境には、段が付く。内外面共に摩滅が著しく調整は不明であるが、内面頸部から胴部上方にかけて指頭痕が残る。また、外面には、黒斑が見られる。胎土は、 ϕ 2~3mm程度の白色砂粒を多く含み、焼成は良好である。内面は褐灰色（10YR5/1）、外面はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。弥生時代前期の所産である。

2は、弥生土器壺の底部である。残存高3.5cm、底径7.4cm（復元）を測る。外面はナデ調整を施すが、底部及び内面は摩滅が著しく不明である。胎土には、 ϕ 1~3mm程度の白色砂粒を多く含み、にぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。焼成は、良好である。弥生時代前期の所産である

3は、弥生土器壺の口縁部である。小片の為、口径の復元は出来なかった。残存高3.5cmを測る。焼成は良好で、明褐色を呈する。胎土には、 ϕ 1~2mm程度の白色砂粒を多く含む。弥生時代前期の所産である。

4は、弥生土器壺の底部から胴部である。底径9.7cm、残存高12.5cmを測る。焼成は良好で、にぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。胎土は、 ϕ 1~5mm程度の白色砂粒を多く含む。内外面共に摩滅しているものの、外面はミガキを、内面には工具痕が残り工具ナデを、底面はヨコナデ調整を施す。外面の磨きは横方向、内面の工具ナデは斜め方向である。弥生時代前期の所産である。

5は、弥生土器鉢の底部である。底径10.4cm、残存高7.6cmを測る。内面及び底面は摩滅が著しいため調整は不明であるが、外面にはナデ調整が施される。焼成は良好で、にぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。弥生時代前期の所産である。

6は、弥生土器甕の口縁部である。残存高3.9cmを測る。焼成は良好で、にぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土は、 ϕ 2~3mm程度の白色砂粒を多く含む。内外面共にナデによる調整が施されるが、外面口唇部直下には口唇部整形に伴う指頭痕が残る。外面にススが付着する。弥生時代前期の所産である。

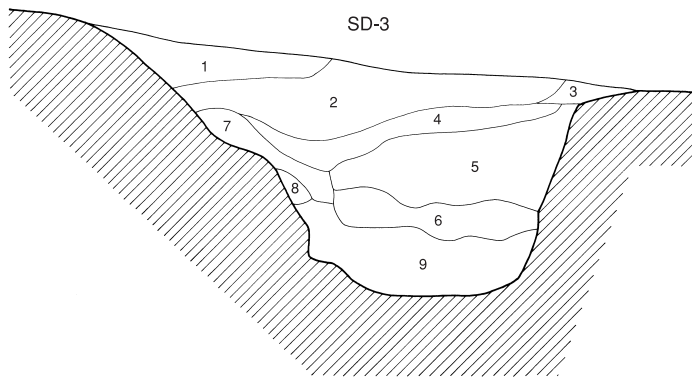
7は、弥生土器甕の口縁部である。残存高6.5cmを測る。焼成は良好で、にぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。口唇部直下に断面三角形の突帯を貼り付け、刻み目を施す。口唇部から突帯においては口唇部の整形、突帯の貼り付けに伴うヨコナデ、内外面はナデ調整と思われるが摩滅のため定かではない。弥生時代前期の所産である。

8は、弥生土器甕の口縁部である。口唇部直下に、断面半円形状の突帯を貼り付け、刻み目を施す。残存高3.4cmを測る。焼成は良好で、にぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には、 ϕ 1~2mm程度の白色砂粒を含む。口唇部及び突帯は口唇部の整形、突帯の貼り付けに伴うヨコナデ、内外面は横方向のナデである。内面には、粘土帯接合時の痕跡が残る。弥生時代前期の所産である。

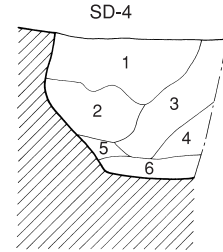
9は、弥生土器甕の口縁部である。残存高3.8cmを測る。口唇部は、断面台形の粘土帯を貼り付け整形し、刻み目を施す。焼成は良好で、外面は黒褐色（10YR3/2）、内面は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。口唇部は粘土帯貼り付けに伴う指押えの後ヨコナデにより整形し、内外面は共にハケメ調整を施す。外面にススの付着が見られる。弥生時代前期の所産である。

10は、弥生土器甕の口縁部から胴部である。口唇部下、約3cmに断面三角形の突帯を貼り付ける。口唇部及び突帯には、刻み目を施す。口径28.4cm（復元）、残存高10.5cmを測る。焼成は良好で、にぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には、 ϕ 2~3mm程度の白色砂粒及び雲母片を多く含む。口唇部及び突帯は整形及び貼り付けに伴うヨコナデ、内外面はナデ調整が施される。また、突帯の内面部分は、突帯貼り付けに伴う指押えのちナデ調整が施される。外面にススの付着が見られる。弥生時代前期の所産である。

11は、弥生土器甕の底部である。底径6.8cm（復元）、残存高7.7cmを測る。外面及び底面はナデ調整、内面は工具によるナデ調整が施される。焼成は良好で、にぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。胎土には、 ϕ 1



1. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1~3mm砂粒含む、よくしまる)
2. 10YR2/3黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)
3. 10YR3/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる)
4. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる) 95%+
10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック (φ1~4cm、よくしまる) 5%
5. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (よくしまる) 40%+
10YR2/1黒色弱粘質土 (よくしまる) 40%+
10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック (φ0.5~4cm、よくしまる) 20%混ざる
6. 7.5YR4/4褐色粘質土 (よくしまる)
7. 10YR2/2黒褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる)
8. 7.5YR4/4褐色粘質土 (よくしまる)
9. 10YR3/4暗褐色弱粘質土 (φ1mm砂粒少量含む、よくしまる) 60%+
10YR2/2黒褐色弱粘質土 (よくしまる) 40%混ざる



1. 7.5YR5/6明褐色粘質土
(φ1~3mm砂粒含む、よくしまる)
2. 10YR3/3暗褐色粘質土
(φ1~2mm砂粒含む、しまる)
3. 10YR3/2黒褐色粘質土 (よくしまる)
4. 10YR3/4暗褐色粘質土 (よくしまる)
5. 10YR6/4いぶい黄橙色粘質土
(φ1~2mm砂粒多く含む、よくしまる)
6. 10YR7/6明黄褐色粘質土
(φ1~2mm砂粒多く含む、よくしまる)



第25図 力武内畑遺跡10B区 SD-3・4土層断面図 (S=1/20)

~2mm程度の白色砂粒を多く含む。弥生時代前期の所産である。

12は、弥生土器甕の口縁部である。口唇部直下に断面三角形の突帯を貼り付け、刻み目を施す。焼成は良好で、いぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈する。胎土には、φ1mm程度の白色砂粒を少量含む。口唇部及び突帯は、整形及び貼り付けのヨコナデ、内面は指押さえ後ナデ調整、外面はナデ調整を施す。外面にススの付着が見られる。弥生時代前期の所産である。

SD-2 (第18図、図版8)

SD-2は、A区南端中央部、SD-1西側で検出した。SD-1と切り合うが、先後関係は検出状況、掘削に伴う埋土の観察、出土遺物からも判明しなかった。平面形は、半円形を描き両端がSD-1と切り合う。検出した規模は、長さ1.7m、幅21~60cm、深さ15cmを測る。底面は平坦で、殆ど傾斜も見られないが若干東側に傾斜する。

遺物は、投弾 (円礫) が1点出土した。

SD-3 (第18・25図、図版9・10)

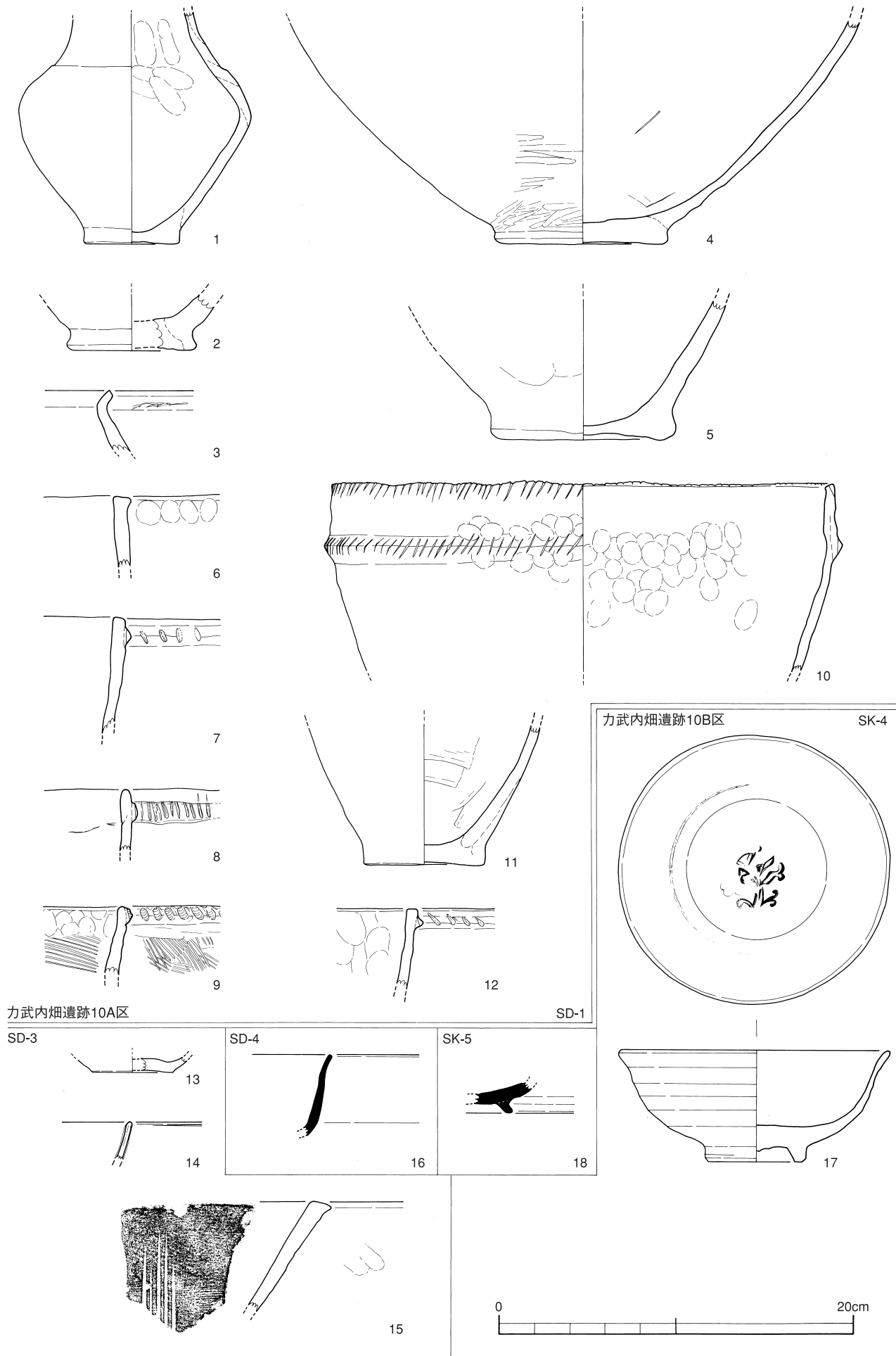
SD-3は、B区中央部で南北方向に検出した。SP-33・34・41に切られ、南北の両端は調査区外へ伸びる。検出した規模は、長さ14.4m、幅0.25~1.64m、深さ8.5~78.5cmである。中央部には、掘り込みが確認され最も深くなる。断面形は、逆台形を呈する。両側面にはテラス、底面には段が付く。底面の傾斜は、殆ど見られない。

遺物は、土師器皿底部片、土師質土器播鉢口縁部片、青磁碗口縁部片、安山岩剥片、焼土塊である。

出土遺物 (第26図、図版13)

13は、土師器皿の底部である。底径4.6cm (復元)、残存高0.7cmを測る。焼成は良好で浅黄橙色 (7.5YR8/4) を呈する。胎土には、微細な雲母片を含む。内外面共に回転ナデによる調整を施し、底部には糸切り痕が残る。

14は、青磁碗の口縁部である。残存高2.2cmを測る。焼成は、良好である。外面は青磁釉による施釉の為、



第26図 力武内畑遺跡10A・B区 出土遺物実測図 (S=1/3)

淡緑色を呈する。胎土は、精良で灰白色を呈する。

15は、土師質土器播鉢の口縁部である。残存高6.2cmを測る。胎土には、 ϕ 1~2mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で、にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。調整は、口唇部内面は摩滅するが外面にヨコナデが見られる事から口唇部整形に伴いヨコナデ、外面はナデ、内面はハケメ調整である。内面はハケメ調整の後、播目が施される。播目は5条確認でき、5条で一単位と思われる。

SD-4 (第18・25図、図版9)

SD-4は、B区南西隅で北西~南東方向に検出した。SK-5を切る。両端部は、調査区外へと伸びる。検出した規模は、長さ3.63m、幅22~54cm、深さ17.5~40.5cmを測る。底面は平坦で、北西に向かい傾斜する。断面形は、逆台形状を呈する。

遺物は、須恵器杯の口縁部片が出土した。

出土遺物 (第26図、図版13)

16は、口縁部を外反させる須恵器杯の口縁部から底部端までである。残存高4.5cmを測る。焼成は良好で、灰色(N6/0)を呈する。胎土には、 ϕ 1mm程度の白色砂粒を少量含む。内外面共に回転ナデが施される。

4. 柱穴

柱穴は、A・B区合わせ67基検出した。内訳は、A区6基、B区61基である。柱穴から遺物は確認されなかった。

本項においては、各区毎に平面形でまとめ、規模を記録する事とする。SP-19・56は欠番である。

A区 (第18図)

(円形)

SP-6：直径20cm、深さ6.5cmである。

(楕円形)

SP-1~3：長軸30~40cm、短軸15~20cm、深さ4~9cmである。

(長方形)

SP-4：長軸55cm、短軸39cm、深さ8cmである。

(不整長方形)

SP-5：長軸70cm、短軸42cm、深さ16cmである。

B区 (第18図)

(円形)

SP-7・10・12・13・16・20・22・25・26・28・29・31・32・35・39・40・42・48・58・65・66・69：直径16~38cm、深さ5~44cmを測る。

(楕円形)

SP-8・9・11・15・17・21・23・24・27・30・36~38・41・46・47・49~51・53・54・57・59・60・62・68：長軸19~60cm、短軸14~41cm、深さ3~40cmを測る。

(方形・長方形)

SP-14・33・34・43~45・52・55・61・63・64・67：長軸20~68cm、短軸15~41cm、深さ13~28cmを測る。

(不整形)

SP-18：長軸65cm、短軸50cm、深さ3cmを測る。

第6章 まとめ

力武内畑遺跡（以下、内畑と呼ぶ）は先述した様に、本調査を含め10地点において調査が行われ、弥生時代から近世までの複合遺跡である事が知られている（第28図）。また、隣接する力武前畑遺跡（以下、前畑と呼ぶ）においても弥生時代から古墳時代の住居跡等が確認され、力武地区における弥生時代から古墳時代の集落様相が明らかとなってきた。中でも内畑7-1・2区において弥生時代前期の井堰や水田跡が確認された事から、特に弥生時代前期の集落について注目されている。本項においては、力武地区から谷を挟み西に近接する三沢南崎遺跡（以下、南崎と呼ぶ）において確認された弥生時代前期の様相を踏まえ、力武地区における集落の様相を弥生時代前期を中心に概観する事とする。

[弥生時代前期の様相]

〈力武内畑遺跡・力武前畑遺跡・三沢南崎遺跡の立地〉

内畑・前畑・南崎の3遺跡は、同様に三国丘陵から派生する低位段丘上に位置する。内畑・前畑と南崎の所在する段丘は谷を挟み南北に伸び、両段丘間に形成される谷部は現在においても水田耕作が行われている。また、両段丘共に段丘端部を示すように現在においても内畑・前畑側は東側に水路があり、南崎側は西に口無川が流れる。この様に、内畑・前畑と南崎の立地には類似点が多いと言える。

〈建物跡〉

内畑・前畑における弥生時代前期の建物跡は、竪穴式住居跡および掘立柱建物跡である。竪穴式住居跡は、内畑7-2・3区で円形住居跡3軒、内畑7-2区で方形と思われる住居跡1軒、前畑2a区で隅丸方形の住居跡1軒が確認されている。掘立柱建物跡は、内畑7-2・3・4区において1間×1間・1間×2間の建物跡が10軒確認されている。これらの建物跡は段丘上の平坦部に建てられている。南崎においては、弥生時代中期から後期の竪穴式住居跡が確認されたが前期の建物跡は確認されていない。

〈貯蔵穴〉

内畑・前畑で確認された貯蔵穴は、前畑1で1基、前畑2で16基、前畑3で10基、合計27基確認されている。形態は、平面が方形・長方形・不整形を呈し、断面が袋状・フラスコ状・長方形のものである。前畑における貯蔵穴は、段丘の縁辺部に位置し、段丘中央の内畑では確認されていない事から力武側の段丘東側縁辺部に貯蔵穴群が置かれている。南崎では、8基確認された。形態は、平面が方形・長方形・楕円形を呈し、断面が袋状もしくは長方形である。南崎における貯蔵穴は、前畑同様に段丘縁辺部に位置している。

〈溝および環濠〉

内畑・前畑では、内畑4・10A区において溝が確認され、規模や形態、方向から同一の溝になると考えられる。規模および形態は、内畑4・10A区間の未調査部分も含め長さ約100m、幅約0.8~1.4m、深さ約0.5~1mを測り、断面逆台形状を呈する。この溝は、北東-南西方向に直線的に掘られ、環濠の様に内部構造物を囲むものではなく、舌状に伸びる段丘先端部を区切り、集落域を示すものと思われる。南崎では、南北方向に若干湾曲する溝を確認している。規模および形態は、長さ約10m、幅約2m、深さ約1.8mを測り、断面V字状を呈する。この溝の西側約50mの地点で下水道工事中に同様の溝断面が確認され、円形に貯蔵穴を囲む環濠である事が確認された。また、現在調査中の南崎3に於いては南崎同様に断面V字状を呈する環濠が確認されていると共に前期の所産と考えられる円形住居跡も確認され、南崎3の環濠は集落を囲む環濠の可能性が窺える。

〈水田跡および井堰跡〉

水田跡は、内畑7-2区で確認された。水田は、幅約30cmの畦畔により長方形に区画されたものである。井堰は、内畑7-1区で確認された。井堰は、杭・矢板により構築され、4段階の構築変遷が示されている。南崎において水田跡及び井堰等の生産遺構は確認されていない。

上記の各項目から内畑・前畑の弥生時代前期の集落構成を考えると、三国丘陵より舌状に伸びる低位段丘の先端部を北東-南西方向に直線的に伸びる溝により区画し、この溝より南側が集落域となっている。段丘上面の平坦部が集落の中心となり、段丘縁辺部に貯蔵穴群が配置されていた事が窺える。さらに、内畑7-2区南側で確認された段丘崖の南側は水田として利用され水稲耕作が行われていると共に、流路の変化に合わせ井堰を構築し補修を行っている事から計画的な水利用を行っていた事が窺える。また、同時期

の遺跡である南崎とは谷を挟むものの直線で約300mほどしか離れておらず、互いに見渡せる状況のなか、確認された溝や環濠が段丘を直線的に切る事により集落域を示す断面逆台形状の溝、貯蔵穴群を区画し囲む断面V字状の環濠、集落を区画する可能性が窺える断面V字状の環濠である事などの差が見られる。南崎においては、1区画（現在、南崎2・3・4が調査中）しか調査が行われておらず、内畑・前畑に比べ広範囲の状況を把握出来るわけではないが、利用目的や区画範囲により形態に差が見られるものと思われる。また、これらの溝及び環濠は内畑に構築された溝が南崎の環濠より先行し築かれたものと思われ、内畑・前畑に見られる集落が南崎に先行し広がりを見せるものと考えられる。

[弥生時代中期・後期の様相]

内畑・前畑における弥生時代中期・後期の遺構は、前畑2a区、前畑3において方形もしくは長方形住居跡が各時期2軒ずつ検出されたに留まり、前期に比べ遺構数が格段に少ない状況である。各住居の立地は、前期の貯蔵穴群の配置された段丘縁辺部に位置している。また、南崎において確認された住居跡もこの時期からのものであり、現在調査中の南崎3においてもこの時期から古墳時代初頭にかけての住居跡が数多く確認されている。

[古墳時代の様相]

内畑・前畑における古墳時代の遺構は、方形住居跡・掘立柱建物跡・溝が確認されている。住居跡の配置は段丘全体に広がりを見せ、段丘縁辺部にも築かれている。内畑4において古墳時代後期の溝が弥生時代前期に集落域を示した溝の北側に見られ、古墳時代にはさらに北に向かい集落が拡大していたものと思われる。

[古代の様相]

内畑・前畑における古代の遺構は、内畑8において確認された掘立柱建物2棟である。この2棟は先述したが9本柱の建物となる事が考えられ、同様の古墳時代後期の建物跡が内畑7-4区でも確認されている。古代においては、段丘を北に登った横隈地区において住居跡が確認され、集落の中心部は段丘上部の横隈地区に移っていたものと考えられる。

[中世・近世の様相]

内畑・前畑における中・近世の遺構は、内畑9において確認された畑跡、内畑1・2・3・4・7-4区・8・10B区において確認された溝、内畑10B区において確認された土壌墓である。特に内畑7-4区・8・10B区で確認された溝は、南北方向に直線的に伸びる事や、内畑7-4区の溝の南端部が東に向かい屈曲する事から区画溝と考えられる。また、この様な区画溝は三沢寺小路遺跡や大保毎々遺跡などからも確認されており、中・近世には周辺地域を含め多く用いられているものである。

この様に、今回調査を行った力武内畑遺跡8・9・10が所在する段丘先端部の各時期の様相を概観したが、特に近年注目される弥生時代前期については各遺構の切り合い、出土遺物等からの先後関係を詳細に検討し、集落様相を捉えると共に、近年続けられている三国丘陵の集落変遷等の検討を踏まえ、小郡市における水稻耕作開始期の集落様相を捉える事の必要性を今回の調査を通じ痛感し、今後の課題となった。

<参考文献>

- 上田恵・佐藤雄史 2005 「力武前畑遺跡3」小郡市文化財調査報告書第202集
- 片岡宏二・宮田浩之 2000 「力武内畑遺跡3」小郡市文化財調査報告書第146集
- 片岡宏二 2004 「力武前畑遺跡2」小郡市文化財調査報告書第189集
- 佐藤雄史 2003 「力武内畑遺跡5・6」小郡市文化財調査報告書第174集
- 中島達也 1998 「力武前畑遺跡」小郡市文化財調査報告書第126集
- 宮田浩之 2001 「力武内畑遺跡4」小郡市文化財調査報告書第156集
- 山崎頼人 2004 「力武内畑遺跡7」小郡市文化財調査報告書第190集
- 山崎頼人・杉本岳史・井上愛子 2005 「筑後北部三国丘陵における弥生文化の受容と展開」古文化談叢第54集
- 山崎頼人・廣木誠 2007 「三沢南崎遺跡」小郡市文化財調査報告書第220集

図 版



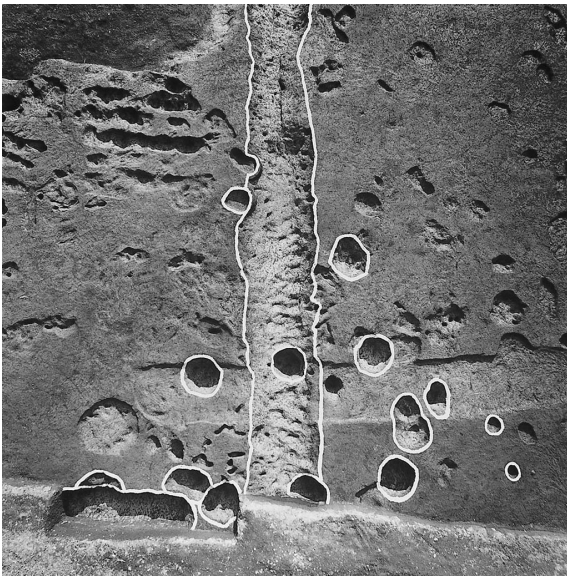
調査区より東を望む(奥中央が花立山)



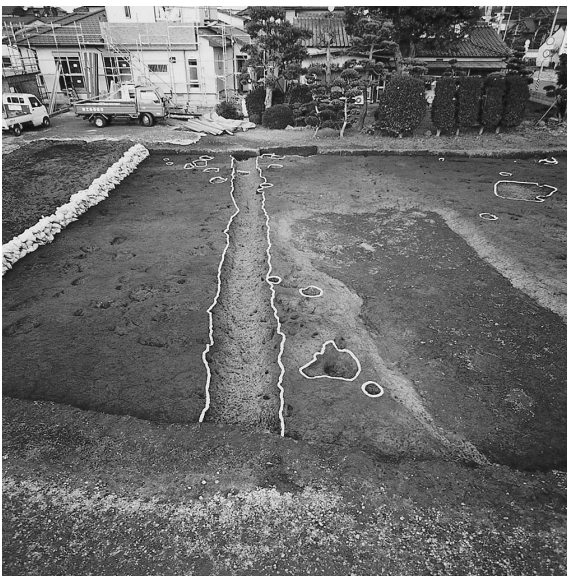
力武内畑遺跡 8・9・10 全景 (真上から)



力武内畑遺跡 8 調査区全景(真上から)



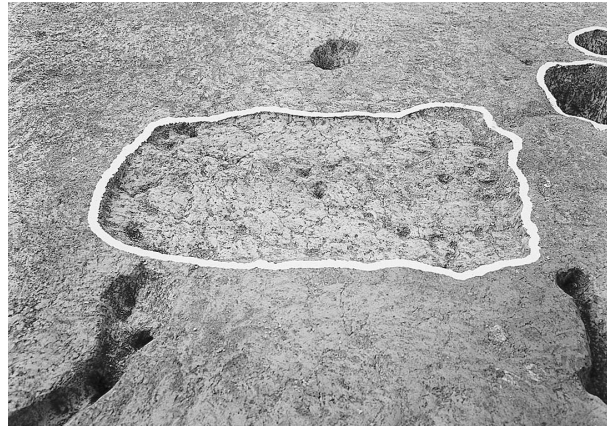
力武内畑遺跡 8SB-2 全景(真上から)



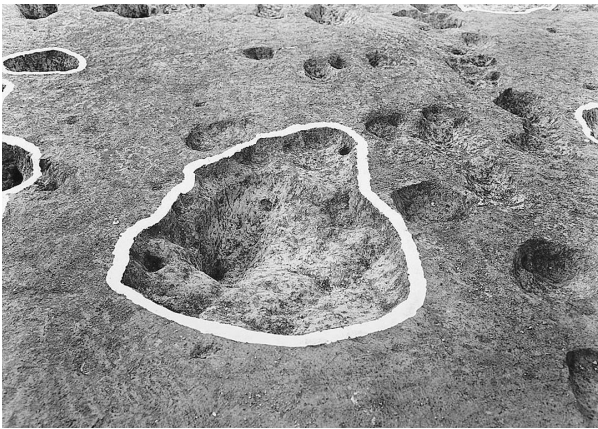
力武内畑遺跡 8SD-1 全景(南から)



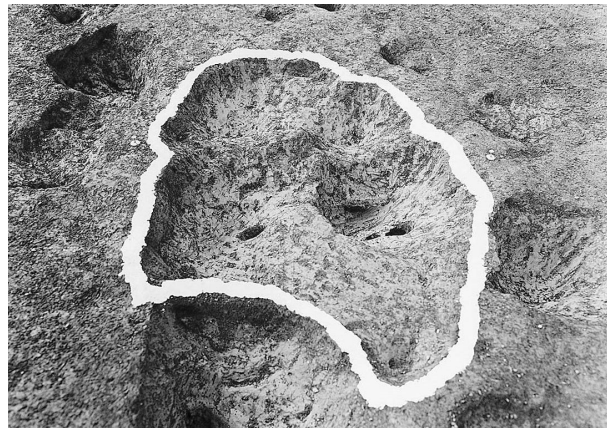
力武内畑遺跡 8SB-1 全景 (東から)



力武内畑遺跡 8SK-1 全景 (東から)



力武内畑遺跡 8SK-2 全景 (東から)



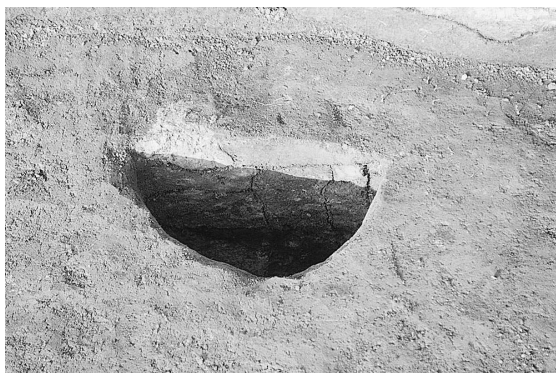
力武内畑遺跡 8SK-3 全景 (東から)



力武内畑遺跡 8SK-4 全景 (東から)



力武内畑遺跡 8SK-5 全景 (南東から)



力武内畑遺跡 8SP-1 土層(南から)



力武内畑遺跡 8SP-2 土層(南から)



力武内畑遺跡 8SP-3 土層(南から)



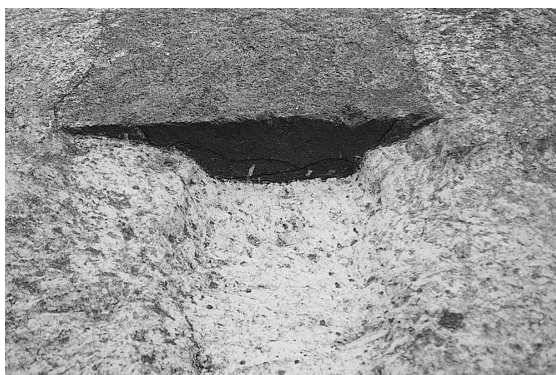
力武内畑遺跡 8SK-2 土層(東から)



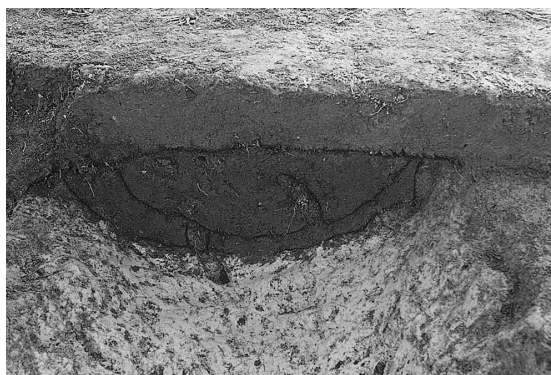
力武内畑遺跡 8SK-3 土層(東から)



力武内畑遺跡 8SD-1B-B' 土層(南から)



力武内畑遺跡 8SD-1C-C' 土層(北から)



力武内畑遺跡 8SD-1D-D' 土層(北から)



力武内畑遺跡 9 調査区全景 (真上から)



力武内畑遺跡 9SD-2・4 全景 (南から)



力武内畑遺跡 9SD-6・7 全景 (西から)



力武内畑遺跡 9SD-1E-E' 土層(北から)



力武内畑遺跡 9SD-2A-A' 土層(北から)



力武内畑遺跡 9SD-2a-a' 土層(北から)



力武内畑遺跡 9SD-3F-F' 土層(北から)



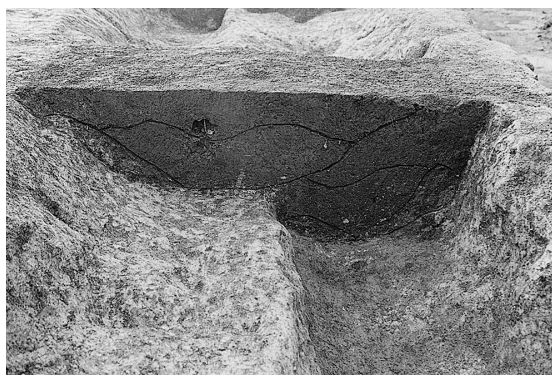
力武内畑遺跡 9SD-4B-B' 土層(北から)



力武内畑遺跡 9SD-4b-b' 土層(北から)



力武内畑遺跡 9SD-6H-H' 土層(北西から)



力武内畑遺跡 9SD-7I-I' 土層(東から)



力武内畑遺跡 10A 区調査区全景 (真上から)



力武内畑遺跡 10B 区調査区全景 (真上から)



力武内畑遺跡 10SD-1 全景 (北東から)



力武内畑遺跡 10SD-1 小壺出土状況(真上から)



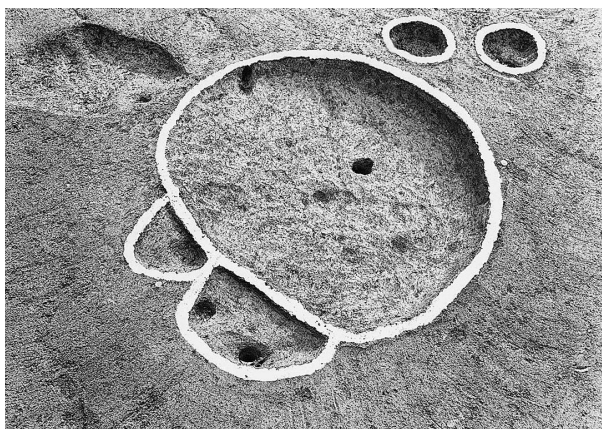
力武内畑遺跡 10SD-1 土器溜り(北西から)



力武内畑遺跡 10SD-2 全景(南から)



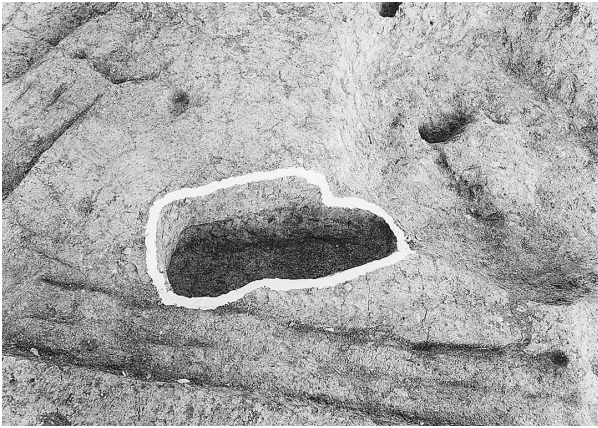
力武内畑遺跡 10SK-1 全景(南から)



力武内畑遺跡 10SK-2 全景(北東から)



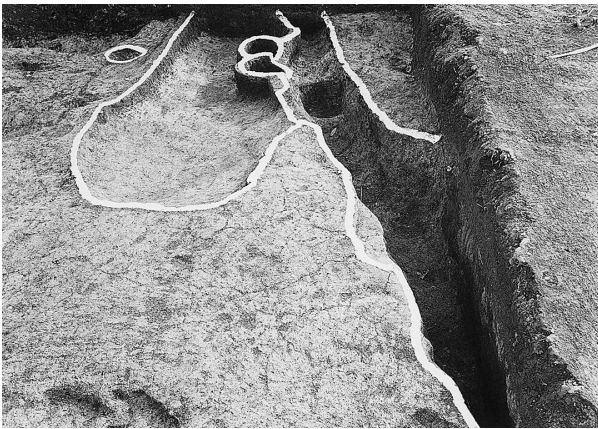
力武内畑遺跡 10SK-3 全景(北から)



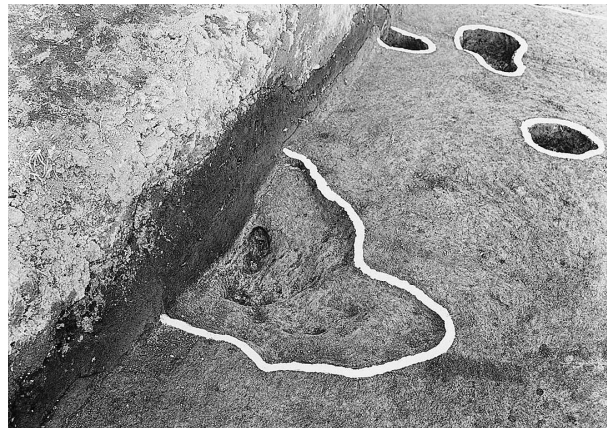
力武内畑遺跡 10SK-4 全景 (西から)



力武内畑遺跡 10SK-4 遺物出土状況 (北東から)



力武内畑遺跡 10SK-5、SD-4 全景 (北から)



力武内畑遺跡 10SK-6 全景 (西から)



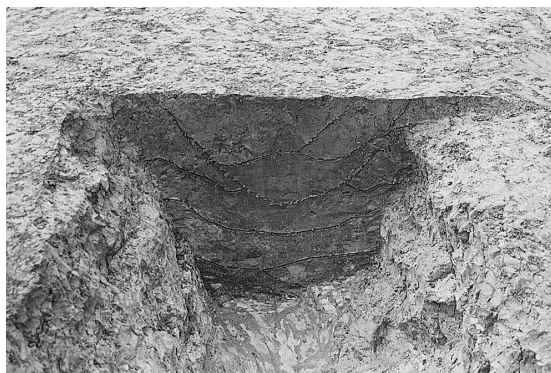
力武内畑遺跡 10SK-7 全景 (西から)



力武内畑遺跡 10SD-3 全景 (南から)



力武内畑遺跡 10SD-1a-a' 土層 (西から)



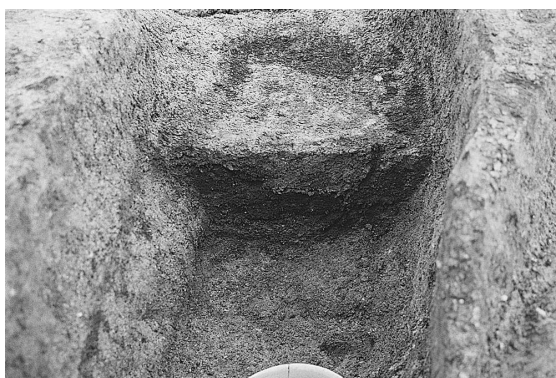
力武内畑遺跡 10SD-1b-b' 土層 (北から)



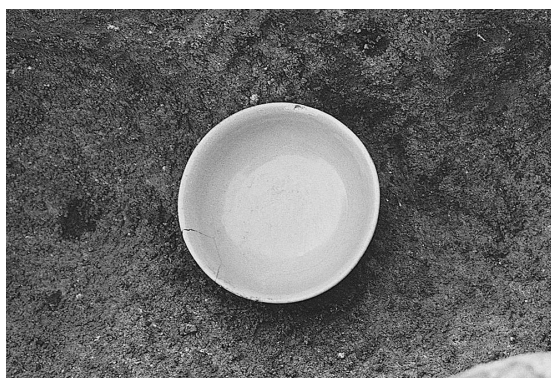
力武内畑遺跡 10SD-1c-c' 土層 (北から)



力武内畑遺跡 10SD-3G-G' 土層 (北から)



力武内畑遺跡 10SK-4 土層 (北から)



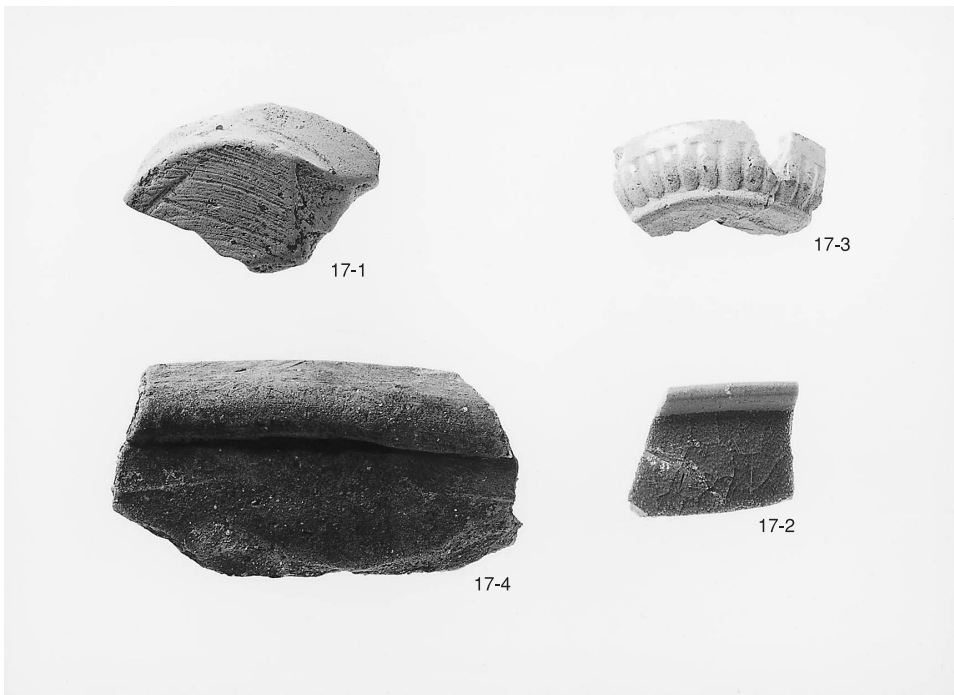
力武内畑遺跡 10SK-4 遺物出土状況 (北東から)



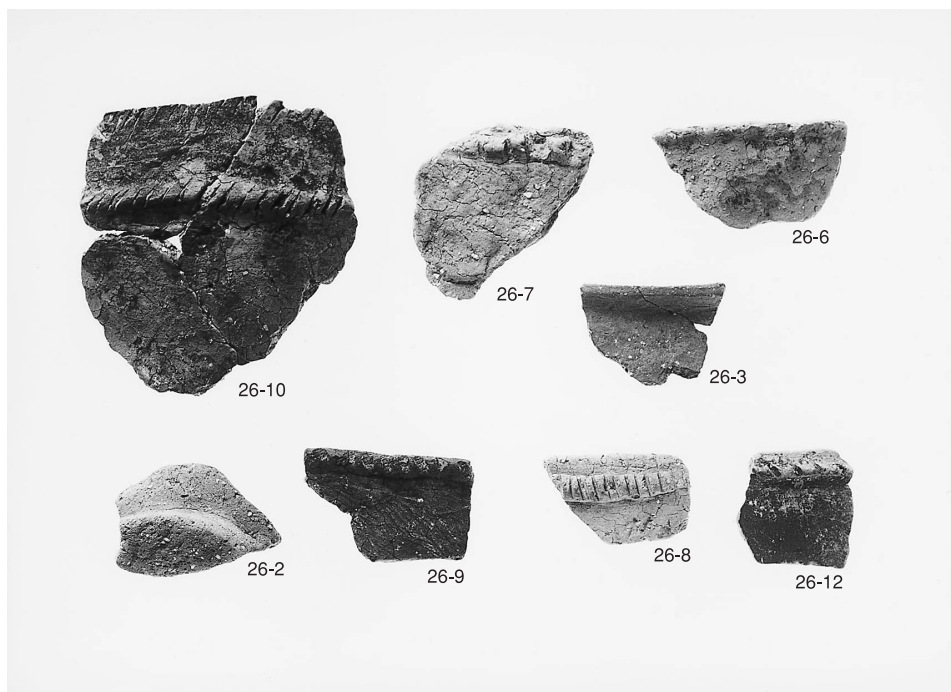
力武内畑遺跡 8・9・10 調査参加作業員



力武内畑遺跡 8 出土遺物



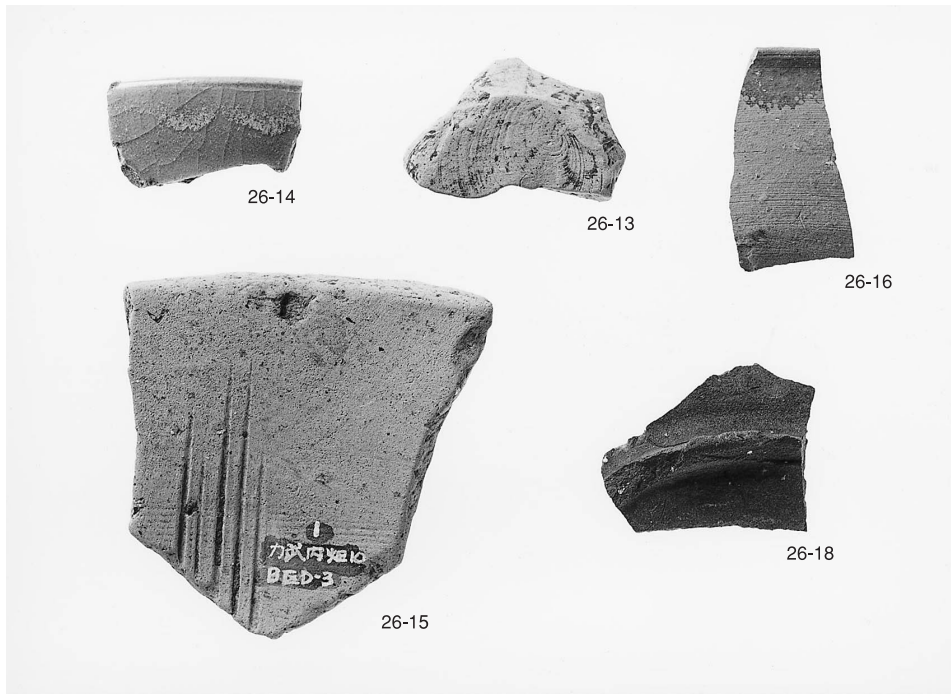
力武内畑遺跡 9 出土遺物



力武内畑遺跡 10A 区 SD-1 出土土器



力武内畑遺跡 10A 区 SD-1 出土投弾



力武内畑遺跡 10B 区 出土遺物



報 告 書 抄 録

ふりがな	りきたけうちはいせき 8・9・10							
書名	力武内畑遺跡 8・9・10							
副書名	福岡県小郡市力武・三沢所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第236集							
編著者名	沖田正大							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 TEL 0942-75-7555							
発行年月日	2008年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
りきたけうちはいせき 力武内畑 遺跡8	おごおりしりきたけ 小郡市力武 1135-1、1135-3	40216		33° 25′ 13″	130° 33′ 53″	2006.11.29 ～ 2006.12.26	429 ㎡	本郷基山 線 街路 緊急地方 道路整備 事業
りきたけうちはいせき 力武内畑 遺跡9	おごおりしりみつわ 小郡市三沢 4083-1、4084-1、 4089			33° 25′ 13″	130° 33′ 48″	2006.10.23 ～ 2006.11.17	345 ㎡	
りきたけうちはいせき 力武内畑 遺跡10	おごおりしりきたけ 小郡市力武 1136、1137-3・4、 1138-1、1143-4、 みつわ 三沢4085-1・7			33° 25′ 13″	130° 33′ 51″	2007.01.09 ～ 2007.02.01	513.1 ㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
力武内畑 遺跡 8	集落	古代 近世	堀立柱建物跡 2 土坑 5 溝状遺構 1 柱穴	土師器高杯・皿 須恵器坏身・坏蓋 土鍋 青磁碗 土錐		古代の堀立柱建物跡2棟 を確認した。		
力武内畑 遺跡 9	集落	古代 中世 近世	溝状遺構 7 柱穴	土師器皿 土師質土器 瓦質土器 青磁碗 磁器合子 黒曜石剥片		中世～近世にかけての畑 の畝溝を確認した。		
力武内畑 遺跡 10	集落	弥生時代前期 古代 中世 近世	土坑 7 溝状遺構 4 柱穴	弥生土器甕・壺 土師器皿 須恵器坏 土師質土器搗鉢 青磁碗 染付碗 投弾、黒曜石剥片		力武内畑遺跡 4 で確認さ れた弥生時代前期の区画 溝の続きを確認した。		

力武内畑遺跡8・9・10

— 福岡県小郡市力武・三沢所在遺跡の調査 —

小郡市文化財調査報告書

第236集

平成20年3月10日

発行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡255-1

印刷 株式会社マリックス
福岡市南区清水2丁目11-1